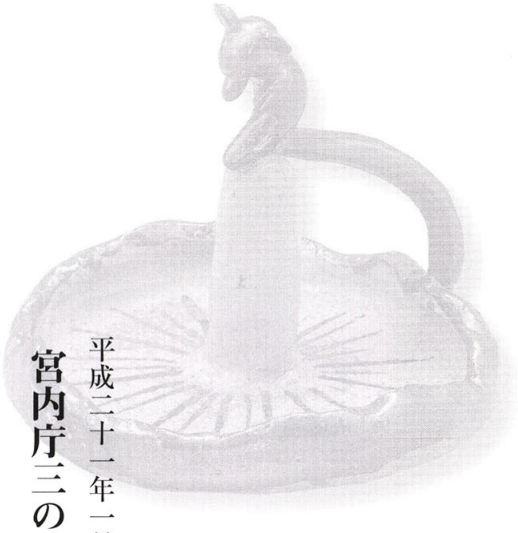
三峰窯の思い出

―宮様とやきもの

三峰窯の思い出

――宮様とやきもの



平成二十一年一月六日(火)～三月八日(日)

宮内庁三の丸尚蔵館

目次

3 ― ごあいさつ
4 ― 宮様とやきもの ― 三峰窯概説
9 ― 三峰窯の御作品
10 ― アルバム 三峰窯の思い出 ― 旧秩父宮家 ―
22 ― アルバム 三峰窯の思い出 ― 旧高松宮家 ―
36 ― アルバム 三峰窯の思い出 ― 陶つくりの会のご様子 ―
38 ― 三峰窯の窯印・銘印と箱書
40 ― 加藤土師萌
47 ― コラム「民芸派」のやきもの
48 ― 河井寛次郎
50 ― 濱田庄司
51 ― 加藤土師萌と三峰窯
55 ― 資料
陶器問答（秩父宮雍仁親王殿下御遺稿）
56 ― 秩父宮妃勢津子殿下　日記抄
60 ― 『玉葉流芳』本文再録
65 ― 出品目録
ii ― List of Exhibits
i ― Foreword

凡例

一、本図録は、平成二十一年一月六日（火）～三月八日（日）までを会期とする展覧会「三峰窯の思い出 ― 宮様とやきもの」の解説図録である。

一、本図録に掲載する図版番号は、出品番号と一致する。

一、作品図版につくキャプションは、出品番号、作者、作品名、制作年、寸法の順番である。三峰窯で制作された作品は、作品名の後に三峰窯と併記した。また、窯印・銘印のあるものは寸法の後に記載した。

一、本図録に掲載する秩父宮雍仁親王殿下の御作の作品名は、『玉葉流芳』（秩父宮御遺作図録刊行会、昭和二十九年）に掲載されたものに準拠したが、他の出品作品と合わせた名称を括弧内に記した。

一、本展覧会で展示する作品のうち、図版番号19～27及び57～61は秩父宮記念公園（御殿場市）所蔵、その他は全て当館所蔵である。

一、本図録に掲載する各作品の寸法の単位はcmである。特に記さない限りは、径（最大径）、高さ、またはD（縦、奥行）×W（横、幅）×H（高）の順で表示した。

一、本図録に掲載する図版番号1～9、13～17の作品解説は、前記『玉葉流芳』所収の加藤土師萌の文章を御遺族の了解のもと転載した。

一、本展覧会の企画及び図録の執筆は、三の丸尚蔵館学芸室研究員岡本隆志が担当した。

一、図録掲載の作品写真は、岩村孝、西村敏、本城克彦（株式会社 便利堂）の撮影による。

ごあいさつ

三峰窯（みつみねがま）は、御殿場御別邸で療養生活を送られていた秩父宮雍仁親王殿下の陶芸に親しみたいという思召しにより、昭和二十五年（一九五〇）に陶芸家加藤土師萌によって築かれた窯です。三峰窯の名前は、御殿場御別邸から眺められる富士、箱根、愛鷹の三峰、そして宮号と縁の深い秩父三峰との関わりから、殿下によって名付けられました。殿下は加藤土師萌の指導を受けられて、年一回三年間にわたって陶芸制作を行われ、限られたわずかな機会にも関わらず、やきものに対するご関心や学究的なお人柄が偲ばれる優れた御作を遺されました。その御作の数々は殿下が薨去された昭和二十八年に、東京と大阪で開催された「秩父宮御遺作展」によって多くの人々の注目を集め、翌年には御作を後世に伝えるべく有志の方々の熱意により、秩父宮御遺作図録『玉葉流芳』として一書にまとめられました。

雍仁親王殿下が薨去されてからしばらくの間、三峰窯は閉じられていましたが、その後再び皇族方や親しい方々がお訪ねになり、秩父宮妃勢津子殿下を囲んでやきもの作りを楽しまれました。高松宮宣仁親王殿下と同妃喜久子殿下もたびたび三峰窯を訪ねられ、ご制作のひとときを過ごされました。両殿下は美術全般にご造詣が深く、お作りになった茶碗などには、いずれの器にも洗練されたご趣味が窺えます。

本展では、旧秩父宮家と旧高松宮家のご遺贈品の中から、三峰窯にまつわる陶芸作品や、その指導に当たった加藤土師萌など両宮家に縁の深い陶芸家の作品を紹介します。

本展開催に当たり、貴重なご所蔵品を出品いただきました御殿場市（秩父宮記念公園）に厚く御礼申し上げます。

平成二十一年一月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　出品作品一覧　（第48回　三峰窯の思い出―宮様とやきもの）

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	茶碗　銘　裾野春（黄瀬戸青織部覆輪茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和27年（1952）	p. 12
2	茶碗　銘　面影（天目釉茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	御制作年不詳	p. 12
3	茶碗　銘　母衣（染付鉄絵熊谷草図茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和26年（1951）	p. 13
4	茶碗　銘　冬籠（白釉茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和26年（1951）	p. 13
5	茶碗　銘　若竹（青織部釉茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	御制作年不詳	p. 14
6	茶碗　銘　つゝ鳥（黄瀬戸風茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和26年（1951）	p. 14
7	茶碗　銘　紅富士（志野風茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	御制作年不詳	p. 15
8	茶碗　銘　不二月（卯の斑釉茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和26年（1951）	p. 15
9	茶碗　銘　瑞光（黄飴釉茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和27年（1952）	p. 16
10	汲出茶碗　銘　残照（飴釉汲出茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和25年（1950）	p. 16
11	汲出茶碗　銘　野分（黄伊羅保釉汲出茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和25年（1950）	p. 16
12	汲出茶碗　銘　牧場（青織部釉汲出茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和25年（1950）	p. 16
13	湯呑　銘　雪解（卯の斑釉湯呑茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和26年（1951）	p. 17
14	大湯呑　銘　五輪（染付湯呑茶碗）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和25年（1950）	p. 17
15	栗鼠灰皿（大）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和25年（1950）	p. 18
16	栗鼠灰皿（小）	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和26年（1951）	p. 18
17	熊谷草灰皿	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和25年（1950）	p. 18
18	茶碗　竹馬と子供	秩父宮雍仁親王殿下	一点	昭和26年（1951）	p. 17
28	伊羅保茶碗	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和31年（1956）	p. 24
29	志野風茶碗　銘　梅花	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和33年（1958）	p. 24
30	織部釉茶碗	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和34年（1959）	p. 25
31	黄瀬戸風茶碗　銘　行く春	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和35年（1960）	p. 25
32	飴釉茶碗　銘　山里	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和38年（1963）	p. 26
33	黒釉伊羅保茶碗　銘　朝雨	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和38年（1963）	p. 25
34	伊羅保茶碗	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和39年（1964）	p. 27
35	瑠璃釉茶碗　銘　老松	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和40年（1965）	p. 27
36	白釉瑠璃覆輪茶碗　銘　一声	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和40年（1965）	p. 26
37	天目釉白覆輪茶碗　銘　歌石（夜やくらき）	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和41年（1966）	p. 28
38	練上げ手茶碗	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和42年（1967）	p. 27
39	練上げ手茶碗　銘　夕月夜	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和43年（1968）	p. 28

40	練上げ手茶碗　銘　天河	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和43年（1968）	p. 29
41	卯の斑釉茶碗	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和44年（1969）	p. 30
42	天目釉茶碗（玳皮盞）	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和45年（1970）	p. 30
43	伊羅保茶碗　銘　夏乃夜	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和49年（1974）	p. 29
44	卯の斑釉平茶碗　銘　青苔	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和49年（1974）	p. 30
45	長石釉茶碗　銘　春雪	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和51年（1976）	p. 31
46	卯の斑釉茶碗　銘　喜雨	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和51年（1976）	p. 31
47	天目釉茶碗　銘　晩夏	高松宮宣仁親王殿下	一点	昭和51年（1976）	p. 31
48	鉄絵白釉薬湯呑茶碗	高松宮妃喜久子殿下	一点	昭和31年（1956）	p. 32
49	鉄絵流灰釉織部掛け分向付	高松宮妃喜久子殿下	一点	昭和33年（1958）	p. 32
50	桜花形灰皿	高松宮妃喜久子殿下	一点	昭和33年（1958）	p. 32
51	黄瀬戸風茶碗	高松宮妃喜久子殿下	一点	昭和35年（1960）	p. 34
52	箸置　貝津くし	高松宮妃喜久子殿下	十一点	昭和38年（1963）	p. 33
53	白磁紅葉文花瓶	高松宮妃喜久子殿下	一点	昭和42年（1967）	p. 33
54	鉄絵白釉徳利、ぐい呑	高松宮妃喜久子殿下	二点	昭和45年（1970）	p. 34
55	鉄絵灰釉雀香合	高松宮妃喜久子殿下	一点	昭和49年（1974）	p. 34
56	俎皿　銘　橋姫、江南	高松宮妃喜久子殿下	六点	昭和51年（1976）	p. 35
62	鉄絵渦文茶碗	加藤土師萌	一点	昭和26年（1951）	p. 41
63	鉄絵磁器貝香合	加藤土師萌	一点	昭和38年（1963）	p. 44
64	瑠璃釉陶硯	加藤土師萌	一点	昭和40年（1965）	p. 44
65	葱文大皿	加藤土師萌	一点	昭和5年（1930）	p. 45
66	陶板　狐	加藤土師萌	一点	昭和29年頃（1954頃）	p. 46
67	孔雀緑鳥文鉢	加藤土師萌	一点	昭和32年（1957）	p. 46
68	辰砂呉州碗	河井寛次郎	一点	昭和15年（1940）	p. 48
69	草花文湯呑	河井寛次郎	二点	昭和18年（1943）	p. 49
70	呉州辰砂花扁壺	河井寛次郎	一点	昭和32年（1957）	p. 49
71	鉄絵丸紋蓋物	濱田庄司	一点	昭和10年代	p. 50

宮様とやきもの ― 三峰窯概説

本展は、秩父宮雍仁親王殿下、同妃勢津子殿下、ならびに高松宮宣仁親王殿下、同妃喜久子殿下が、旧秩父宮家の御殿場御別邸の三峰窯でお作りになった御作、そして三峰窯で宮様方の作陶指導に当たった加藤土師萌のほか、河井寛次郎や濱田庄司など、宮様が御別邸でお使いになっていた陶芸家の作品を紹介するものである。しかし、三峰窯における宮様方の御作陶はプライヴェートなご活動であったため、地元の御殿場を除いて、一般的にはあまり知られていない。そこで本概説では、三峰窯を始められた雍仁親王殿下を中心に、宮様がやきものにご興味をもたれた背景にふれつつ、三峰窯における御作陶について述べることとしたい。

やきもののお好み

陶器をやくと云えばすぐ芸術的作品を連想されるかも知れないが、僕が今やっているのは幼稚園や小学校でこねまわした粘土細工と大差ないのだからね。

秩父宮御遺作図録『玉葉流芳（ぎょくようりゅうほう）』に収められた雍仁親王殿下の御遺稿「陶器問答」（55ページ参照）でのユーモアを交えたご回答ぶりを拝読すると、殿下は陶芸に関してはまったくの門外漢で、ふとした思いつきで作陶を始められたかのように思われる。しかし、殿下に関するいくつかの著述によれば、殿下がやきものに対して並々ならぬご関心をお持ちで、三峰窯での御作陶が長い時間をかけて温めてこられたお考えを、ようやく実行に移されたものだと推察されるのである。例えば、昭和二十二年に実施されたインタヴューをもとにまとめられた、『御殿場清和』（世界の日本社、昭和二十三年）の「趣味の数々」と題する章のなかでは、やきものについて次のような質疑応答から始まる。

柳澤健（筆者註：質問者）

陶器類をお好きのように存じあげますが……。

殿下

僕にはそれを語る資格はないですよ。第一、好きと言って、どういう意味に解するか、―興味、それは持っているのですね。もともと―と言っても子供の時からという訳ではないのですが、好きは好きでした。ただ、どういうところが好きかと聴かれても、ちょっと困りますがね。金のかかるコレクションのようなことはちっともしていない。見るのは非常に面白い、それで展覧会にはよく出かけました、―大いに興味を感じて見るだけですが……。

この後、インタヴューは古今東西のやきものや宮家でお使いになっていた食器などの話題に及び、殿下は九谷や有田から始まり、イギリスの陶器やデンマークの磁器まで幅広い知識を披露されている。また、それだけでなく、清水六兵衛、河井寛次郎、伊東陶山など当代一流の陶芸家の名前を挙げられ、お好みの一端も示されている。

雍仁親王殿下が、三峰窯で御作陶を始められる前からやきものに関する高い教養をお持ちであったことは、殿下の作陶指導にあたった加藤土師萌も『玉葉流芳』のなかで述べている。

元来殿下の陶芸への御関心は新古に通じ、古陶の名品も可なり愛蔵されていた模様であるが惜しくも赤坂の御殿で焼失された由である。殿下の古陶鑑賞の手引は、恐らく、細川護立氏、奥田誠一氏あたりで、絶えず眼に触れられるものが、天下の名品であり、生来の天倫と御育ち柄が違い自然に備わる御素質がその鑑識を深めるのは道理である。

戦災で焼失してしまったものの、「赤坂の御殿（筆者註：表町御殿）」には古陶を愛蔵されていた由で、殿下の「金のかかるコレクションのようなことはちっともしていない」という先のご発言はいささか謙遜なさっているようである。引用した文中で加藤は陶磁鑑賞に関する殿下の教授役として二人の人物を挙げている。一人目は侯爵細川護立（明治十六年～昭和四十五年）である。細川護立は熊本藩主であった細川家第十六代当主で、戦前は貴族院議員をつとめる一方、国宝保存会会長、東洋文庫理事長を歴任、戦後は正倉院評議会評議員、文化財保護委員会委員として

挿図1　彩壺会陶器展をご覧になる秩父宮同妃両殿下（昭和4年5月20日、日本橋三越）

文化財の保護に尽力した。その経歴が示す通り、美術品に対する造詣が深く蒐集家としても著名で、蒐集品は細川家伝来の文化財とともに永青文庫に収蔵されている。大正から昭和初期の美術工芸家との緊密な関係が記された、東京美術学校校長正木直彦の『十三松堂日記』にも、細川の名前が頻繁に散見されるように、古美術だけでなく同時代の美術にも理解があり、陶芸作品も蒐集の対象としていた。昭和五年の第十一回帝展で加藤土師萌の《葱文大皿》（出品番号65）を雍仁親王殿下が買い上げられた際、殿下に展覧会場をご案内していたのも細川であった。その細川に、まだ新進陶芸家であった加藤土師萌を紹介したのが、先の引用文で殿下の教授役として二人目に名前を挙げられた奥田誠一（明治十六年～昭和三十年）である。奥田は古陶磁に強い関心を持ち、東京帝国大学文科大学心理学科を卒業後、大正三年に同大学心理学教室内に陶磁器研究会を設立した。研究会は後に「彩壺会（さいこかい）」と命名されるが、他の設立メンバーに弾道学の研究で工学博士となる大河内正敏らがおり、古陶磁を骨董趣味や茶の湯道具としてではなく、学術的な視点に基づいて鑑賞、研究することを重視した団体であった。会員の研究対象は、古九谷や古伊万里、色鍋島などのわが国の近世陶磁や中国陶磁が中心で、それらは大正期以降に相次いだ国内外の古窯址発見を受けて大きな進展を見せた分野でもあった。挿図1は、昭和四年五月二十日、日本橋三越で開催されていた彩壺会陶器展をご覧になる秩父宮同妃両殿下のお写真である。展覧会場の様子からも、箱書や伝来に偏った名品主義ではなく、同種のものを多数比較することでその産地の特徴を把握しようとする、彩壺会の実証的な研究姿勢がうかがわれる。加藤土師萌が述べたように、奥田誠一がやきものの教授役をつとめていたのであれば、殿下は当時としては最新の研究成果にふれられる機会をお持ちであったわけである。なお、御殿場御別邸に保管されている殿下の御蔵書には、彩壺会の会員が中心になって完成させた本格的な陶磁研究叢書である『陶器講座』全十三巻（雄山閣、昭和十～十一年）が含まれており、実物だけでなく書籍を通じてもやきものを学ばれていたようである。

さらにもう一葉のお写真から殿下とやきもののエピソードをたどってみたい。挿図2は、昭和十二年二月十四日、両殿下が京都の国立商工省陶磁器試験所を視察された時のものである。この陶磁器試験所は明治二十九年に京都市立陶磁器試験場として設立され、図案の研究のほか釉薬や原材料の試験を専門に行う、京都初の陶磁器専門の研究指導機関であった。大正八年には国に移管されて国立商工省陶磁器試験所と改称した。加藤土師萌がつとめていた岐阜県陶磁器試験場も同様の研究機関で、伝統的な窯業地に新しいデザインや技術を導入することで、国内外における日本陶磁の普及を図った。昭和初期になると、展覧会出品作に見られる美術的性格の強い陶磁作品と新興の中産階級及び上流階級向けの産業陶磁の

折衷、要するに洗練されたデザインによる高品質の日用食器の開発が、輸出振興をも視野に入れた陶磁器試験所の重点的な研究課題となっていた。お写真は、試験所の彫刻部で陶彫製作の様子を両殿下がご覧になっているところで、一番左側に正装姿で直立しているのが陶彫家の沼田一雅（明治六年～昭和二十九年）である。昭和七年に商工省陶磁器試験所に赴任した沼田は、「彫刻の陶磁器工芸化」を目標に掲げた、わが国の陶彫制作の第一人者として知られる人物であった。沼田の試みは、すでに展覧会芸術として確立していた美術（彫刻）の分野に、工芸以外の何物でもないと考えられていた陶磁を組み込もうとする挑戦であり、前述した陶磁器試験所の方針とも重なる面があった。沼田は昭和三年から四年にかけて、秩父宮家の表町御殿玄関脇に設置する置物の依頼を受け、陶彫による唐獅子像を製作した（私家版『雍仁親王御事跡資料』、財団法人秩父宮記念会、昭和三十五年。以下、沼田に関する記述は同資料を参照した）。ブロンズではなく陶彫で作ることになったのは殿下直々のご希望であった。また、《陶彫唐獅子》（挿図3）完成後、表町御殿へ設置に参上した沼田に対して、殿下は「この青色は酸化銅ですか」と、唐獅子にほどこされた釉薬についてお尋ねになった。これには沼田も「このやうに専門的な釉薬原料のことまで、殿下がよく御承知で居られたことに、恐れ入つた次第である」と、後年になっても忘れられないこととして回想している。わが国では決して一般的ではなかった陶彫についてご存知であった点、釉薬の着色剤に関しても専門的な知識をお持ちであった点など、沼田の話からも殿下がやきものに関してかなり高度な素養を身に付けられていたことが推察される。

高松宮宣仁親王殿下には、雍仁親王殿下のようなやきものにまつわる具体的なエピソードはあまり残されていないが、美術工芸全般に幅広い知識をお持ちであったことが知られている。財団法人日本美術協会や社団法人日本工芸会など数々の美術工芸団体の総裁をつとめられ、特に伝統工芸には力を入れられており、日本伝統工芸展では総裁賞を御自身お一人で決められた。総裁賞は、専門家や学識経験者が投票で最終的に六点に絞り込んだなかからお選びになったが、受賞作のほとんどが専門家の下馬評と一致していたそうである。殿下の審美眼の確かさについて、殿下と同時期に日本工芸会会長をつとめた細川護貞は、やはり抜群の美意識をお持ちであった御母君の貞明皇后から受け継がれたものだろうと推測している（『高松宮殿下の勝れた審美眼』、『高松宮宣仁親王』、朝日新聞社、昭和六十三年）。

このように、やきものや美術工芸に広く確かな鑑識を身に付けられていた宮様方が、三峰窯においてどのような御作陶をなさったのかを、以下に見てゆく。

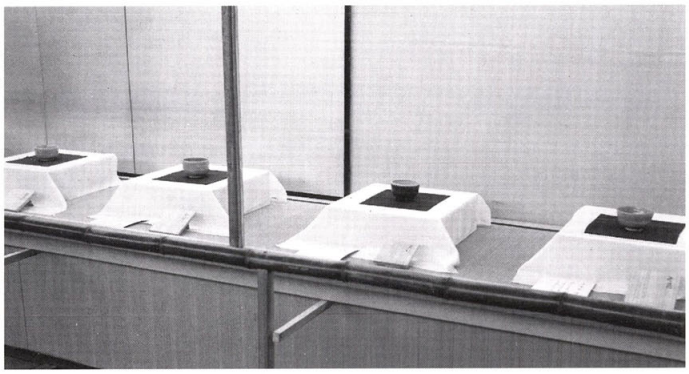
挿図2　国立商工省陶磁器試験所を視察される秩父宮同妃両殿下（昭和12年2月14日）

挿図3　沼田一雅《陶彫唐獅子》昭和4年、当館蔵

三峰窯の思い出

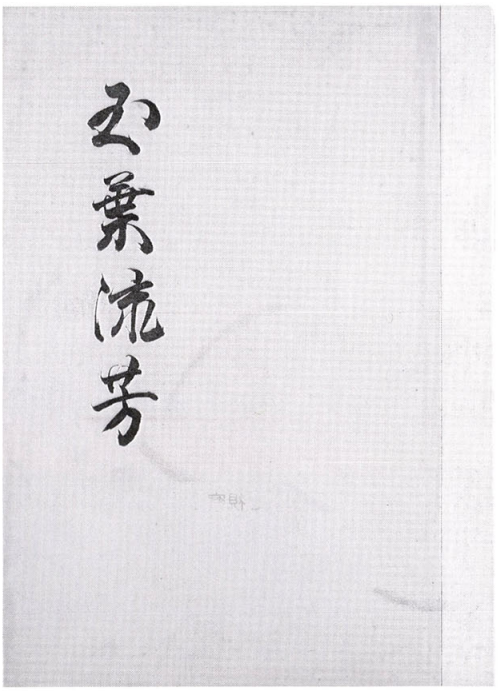
三峰窯は、昭和二十五年七月に秩父宮家御殿場御別邸の敷地に、陶芸家加藤土師萌によって築窯された窯である。築窯のきっかけは御別邸でご療養中であった秩父宮雍仁親王殿下のご希望によるものであった。しかも、趣味程度の楽焼窯ではなく、一二五〇度以上の高温焼成が可能な本焼窯をご所望であったため、加藤は様々な窯を参考にして思案を重ね、小型ではあるが優れた性能を持つ窯を完成させた（築窯の詳細は、後掲「加藤土師萌と三峰窯」、同『玉葉流芳』本文再録」を参照）。

雍仁親王殿下は、窯が完成した昭和二十五年九月、そして翌二十六年十一月と二十七年七月の三度にわたって作陶された。最初の年は手びねりの灰皿や紐造りの湯呑を作られたが、二年目には加藤の指導を受けられて轆轤の練習を積まれ、加藤も驚くほどの上達ぶりを示された。これは師の教えを素直にお聞きになり、我見を加えずにその教えを忠実に守り、何事にも堅実に取り組まれる、殿下のご性格ゆえであった。しかしながら、殿下が御作陶することができたのはご体調の良いときに限られ、必ずしも十分な時間を御制作に当てられたわけではなかった。『玉葉流芳』の一節、「ろくろ場につかれ、髪は乱れ、鼻水は正に落ちそうになつ



挿図５「秩父宮御遺作展」会場の様子（昭和28年11月、銀座松屋画廊）

挿図６「秩父宮御遺作展」をご覧になる勢津子妃殿下（右端は加藤土師萌）



挿図４『玉葉流芳』表紙（題簽：高松宮宣仁親王殿下）

ていても泥手ではどうしようもないのか一心になさつていた」とある、まさに精魂を傾けられた作陶のご様子を拝すると、御作一点一点の重みに粛然としないわけにはいかない。それらを踏まえた上で、加藤は殿下の御作について次のように高く評価している。

初歩的技術でしかない作品でありながら、内包する品格とか格調の高さというものが、どの作品からも浸み出ていて、我々の心を衝くものがある。特に茶盌に於て一入その肝銘を深くすることが出来る。

勢津子妃殿下は、ご療養中であった殿下のおそばに絶えず付き添われ、御自身のやきもの作りよりも殿下のご体調を常に気にされていたようである。この三回の窯では、加藤が御別邸でお使いになる皿などを両殿下のご希望をうかがって作り、両殿下の御作だけでは点数が不足する分を埋め合わせた。また、殿下が宮家の職員や御別邸近隣の住民に陶芸を奨励されたため、各自が思い思いのやきものを作り、三峰窯を囲んで束の間の和やかなひとときを過ごした。まだ当時は現在のように手軽に陶芸体験が出来る時代ではなく、年に一度のこのかけがえのない団欒は三峰窯がもたらした功用であった。

現在、私たちがこうして三峰窯での殿下の作陶のご様子やその他諸々について知ることができるのは、殿下が薨去された翌年に刊行された秩父宮御遺作図録『玉葉流芳』（挿図4）のお陰である。『玉葉流芳』は加藤土師萌が編者となり、昭和二十九年九月五日、社団法人日本陶磁協会内に設置された秩父宮御遺作図録刊行会（発行者代表：梅澤彦太郎）から発行された。同書には殿下が制作された作品すべてが、妃殿下の箱書とともに図版入りで掲載される。題簽を高松宮宣仁親王殿下がお書きになり、殿下の御遺稿「陶器問答」、細川護立の序文、妃殿下の日記抄、そして加藤の本文（図版解説を含む）という内容である。加藤の「まえがき」によれば、東京の銀座松屋画廊（昭和二十八年十一月二十四日～二十九日）と、大阪の日本橋松坂屋画廊（同年十二月十二日～二十日）で開催された、「秩父宮御遺作展」（挿図5、6）の予想外の盛況を受けて、二度と公開されることはなかろうという名残を惜しむ気持ちと、貴重な文化財として記録しておきたいという使命感から、『玉葉流芳』の出版は企画された。「スポーツの宮様」として知られていた殿下のその立派な御作ぶりは、当時の人々に知られざる意外な一面を垣間見せただけでなく、深い感銘を与えたことだろう。加藤は、『玉葉流芳』の出版だけでなく、宮家からの依頼により殿下の骨壺を制作し、殿下への最後の奉仕を果たした。本図録では、『玉葉流芳』の歴史資料としての重要性に鑑み、「陶器問答」、妃殿下の日記抄、加藤の本文を再録した。

雍仁親王殿下が薨去されて、三峰窯はしばらくのあいだ閉じられた。数年後、宮様を偲んで、高松宮宣仁親王殿下、三笠宮崇仁親王殿下の御兄弟や妃殿下方、

宮様の登山仲間であった方など、宮様にゆかりのある方々が集まり、陶つくりの会が開かれるようになった。秩父宮記念公園に保管される「三峰窯陶つくりの会関係資料」によれば、陶つくりの会は昭和三十一年から同五十一年までの間に合計十四回開催された。途中からは常陸宮同妃両殿下も加わられ、親しい方々の親睦会としての意味合いが強まったようである。宮家のご都合などにより毎年というわけではなかったが、初期の三峰窯と同様に、七月や八月の夏の盛りに催された。加藤土師萌は再び作陶指導を仰せつかったが、同四十三年に急逝したため、雍仁親王殿下の御作陶の頃から手伝いを任されていた、加藤達美（加藤土師萌長男）、加藤佳明（同次男）が引き継いで陶つくりの会を最後まで支えた。

宣仁親王殿下は十四回すべての陶つくりの会に参加された。お作りになったのは茶碗だけであった。御作陶の様子はお写真から拝することができるが、妃殿下方のお話からもそのご様子をうかがうことができる（「宣仁親王を偲んで　思いやり深くお優しかった宮様」、前掲『高松宮宣仁親王』）。

高松宮妃

宮さまはお茶碗ばかりおつくりになって、ほかのものはなんにもおつくりにならなかった。

秩父宮妃

それが実にお立派なんです。堂々としたお茶碗で、大きくてね。

挿図7　三峰窯のろくろ場（平成20年9月17日、筆者撮影）

挿図8　三峰窯（平成20年9月17日、筆者撮影）

高松宮妃

手びねりでね。ひもづくり。

秩父宮妃

そして実に大きい。素人は大体小さくなるんですって。焼くと縮まると幾ら聞いても、初めっから大きくできない。ところが、高松宮殿下はさすがに堂々としたのをおつくりになる。

高松宮妃

本当に。

秩父宮妃

三つ以上は絶対おつくりにならない。「済、ん、だ」とおっしゃってすぐお立ちあそばしてね（笑い）。それで人にお譲りになるわけよ、その場所を。周りのことに、よくお気のつく方だった。

高松宮妃

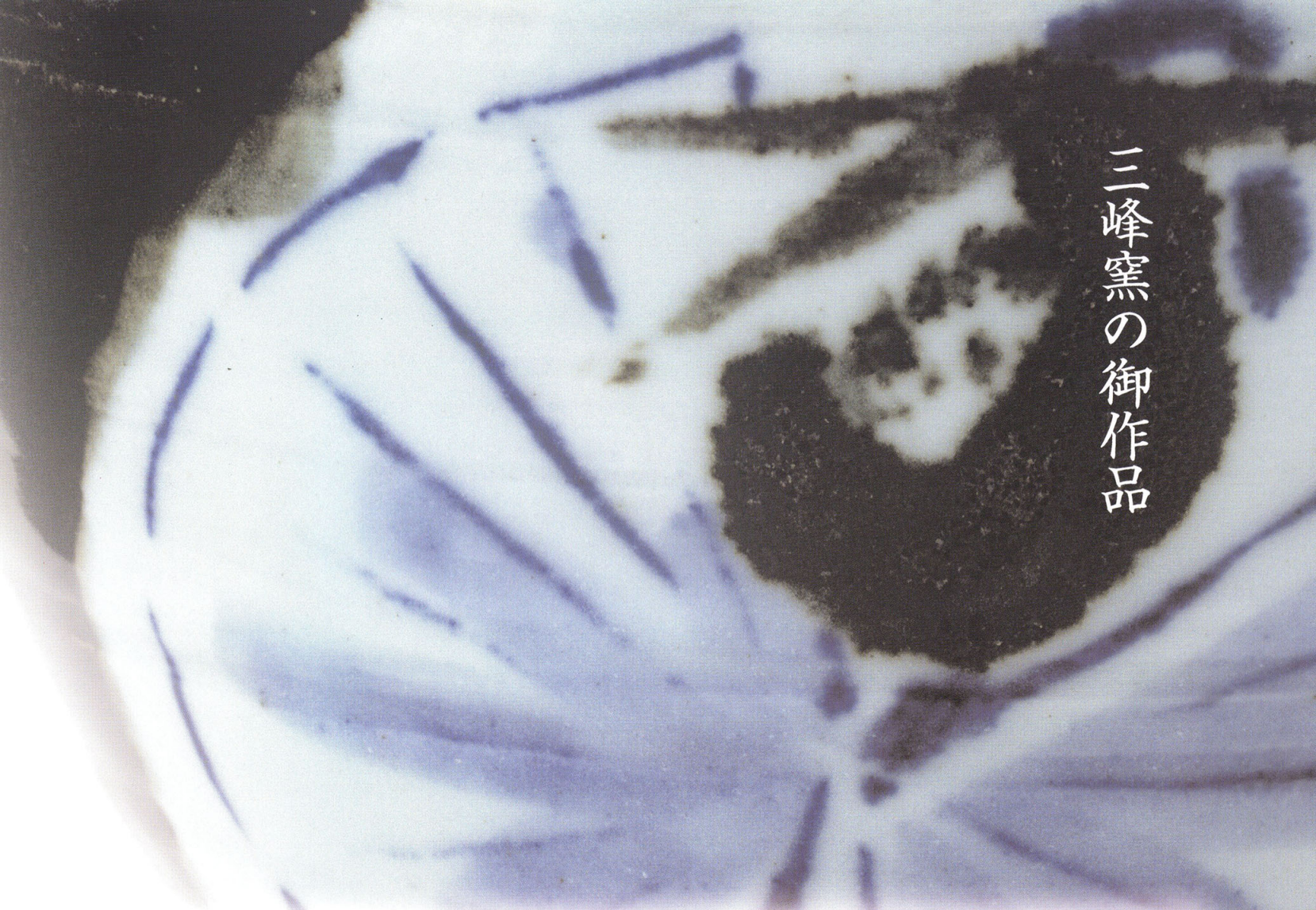
いかにもお楽しそうでしたね。

宣仁親王殿下はスケールの大きい豪快な御作を作られる一方で、鋭敏とさえ映る極薄の繊細な茶碗も残されている。妃殿下方のお話にのぼるように、様々なところへ気を配られるということは、御作陶においても出来上がった作品のイメージを明確に念頭に置きつつ、周到に制作にあたられたことにもつながる。一見すると両極端のようにもうかがえる殿下の御作も、実際は土に向き合われたそのときどきのお気持ちを正確に反映した所産なのである。

旧秩父宮家の御殿場御別邸は、勢津子妃殿下のご遺言により御殿場市へ寄贈され、平成十五年に秩父宮記念公園として一般公開が開始された。現在では、毎年多くの観光客が訪れる御殿場の観光名所の一つとなっている。かつて、加藤土師萌によって宮様方の作品が焼かれた三峰窯も市の指定文化財となり、ほぼ昔のままの姿をとどめて公園内の片隅にひっそりと現存する（挿図7、8）。往時のにぎわいを回顧する、宮様方の御作がつどった本展が、三峰窯を偲ぶよすがとならんことを切に願う。

岡本隆志（おかもと　たかし／当館学芸室研究員）

秩父宮雍仁親王殿下（ご誕生：明治三十五年六月二十五日、薨去：昭和二十八年一月四日）
秩父宮妃勢津子殿下（ご誕生：明治四十二年九月九日、薨去：平成七年八月二十五日）
高松宮宣仁親王殿下（ご誕生：明治三十八年一月三日、薨去：昭和六十二年一月三日）
高松宮妃喜久子殿下（ご誕生：明治四十四年十二月二十六日、薨去：平成十六年十二月十八日）



三峰窯の御作品

三峰窯は御殿場御別邸で療養されていた秩父宮雍仁親王殿下のご希望を受けて、昭和二十五年に陶芸家加藤土師萌が御別邸の敷地内に築いた陶芸用の窯である。同二十八年に殿下が薨去されるまでに、毎年一回の火入れでわずか三回だけの御作陶であったが、加藤の指導を受けられて茶碗を中心に制作にあたられた。ご体調の良いときに熱心に轆轤（ろくろ）に取り組まれたという趣ある茶碗には殿下の陶芸に対する造詣の深さが表われ、またリスや熊谷草など御殿場でのご生活から取材された灰皿には独創的でユーモアのあるお人柄が偲ばれる。これらの御作品について、本図録では殿下の御遺作図録『玉葉流芳』に掲載された加藤土師萌の図版解説とともに紹介する。また、そばで支えられた勢津子妃殿下は、殿下が制作にあたられていた時期には、そのそばで見守られていたようで、その御作は少なく、昭和三十一年以降、親しい方々をお招きになって三峰窯を再開されてからのものが多い。可愛らしい香合や水滴のほか、花瓶では柔らかな造形を生み出されている。

秩父宮殿下の弟宮であられる高松宮宣仁親王殿下は、喜久子妃殿下とともに昭和三十一年から同五十一年にかけて行われた「三峰窯陶つくりの会」に参加されて、数々の御作をお作りになった。殿下の御作は全て茶碗であるのが特徴で、成形も手びねりと轆轤の両方で作られ、その時々で色々な釉薬を試みられている。大ぶりで重厚な造形は、雍仁親王殿下の堅実であるが小ぶりで軽やかさを感じさせる御作とは対照的である。妃殿下の御作には香合や文鎮のほか、皿や箸置など日常の食器にいたる作域の広さとともに、その形状に合わせた色遣い、絵付けを自由に楽しまれたご様子がうかがわれる。

三峰窯の築窯に尽力し、その後も雍仁親王殿下の御作陶を支えた加藤土師萌は、殿下薨去後に再開された「三峰窯陶つくりの会」でも引き続いて作陶指導を行い、自らも展覧会出品作とは趣を変えて素朴だが深い味わいのある小品の数々を残した。これらは宮様方がご日常にお使いになることを考慮して作られたものであるが、釉裏金彩や色絵磁器などの絢爛豪華な作風で知られる加藤の全く別の一面が映し出された貴重な作品である。

アルバム

三峰窯の思い出

―旧秩父宮家―

轆轤成形を披露される雍仁親王殿下
（昭和26年11月14日）

窯出しされた御作をご覧になる両殿下と加藤土師萌
（昭和26年11月14日）

御自作の《栗鼠灰皿》(出品番号15または16)
をご覧になる両殿下（昭和25～27年頃）

加藤土師萌から轆轤の指導を受けられる勢津子妃殿下
（昭和35年7月20日）

加藤土師萌と窯出しされた御作品をご覧になる
勢津子妃殿下（昭和38年7月29日）

1 秩父宮雍仁親王殿下
茶碗　銘　裾野春（黄瀬戸青織部覆輪茶碗）三峰窯
昭和二十七年
径一二・七、高台径六・八、高六・七

2 秩父宮雍仁親王殿下
茶碗　銘　面影（天目釉茶碗）三峰窯
御制作年不詳
径一二・〇、高台径五・二、高七・七

3
秩父宮雍仁親王殿下
茶碗　銘　母衣（染付鉄絵熊谷草図茶碗）　三峰窯
昭和二十六年
径一〇・五、高台径五・五、高七・七
松印

4
秩父宮雍仁親王殿下
茶碗　銘　冬籠（白釉茶碗）　三峰窯
昭和二十六年
径一二・三、高台径五・八、高一二・三
松印

5 秩父宮雍仁親王殿下
茶碗　銘　若竹（青織部釉茶碗）　三峰窯
御制作年不詳
径一一・二、高台径七・〇、高七・五

6 秩父宮雍仁親王殿下
茶碗　銘　つゝ鳥（黄瀬戸風茶碗）　三峰窯
昭和二十六年
径一一・四、高台径六・一、高八・四
松印

7
秩父宮雍仁親王殿下
茶碗　銘　紅富士（志野風茶碗）　三峰窯
御制作年不詳
径一一・六、高台径六・三、高六・七

8
秩父宮雍仁親王殿下
茶碗　銘　不二月（卯の斑釉茶碗）　三峰窯
昭和二十六年
径一一・五、高台径六・四、高八・八
松印

9
秩父宮雍仁親王殿下
茶碗　銘　瑞光（黄飴釉茶碗）　三峰窯
昭和二十七年
径一一・五、高台径六・八、高七・三
松印

10
秩父宮雍仁親王殿下
汲出茶碗　銘　残照
（飴釉汲出茶碗）
三峰窯
昭和二十五年
径九・〇、高七・〇

11
秩父宮雍仁親王殿下
汲出茶碗　銘　野分
（黄伊羅保釉汲出茶碗）
三峰窯
昭和二十五年
径八・五、高六・〇

12
秩父宮雍仁親王殿下
汲出茶碗　銘　牧場
（青織部釉汲出茶碗）
三峰窯
昭和二十五年
径九・〇、高六・二

13
秩父宮雍仁親王殿下
湯呑　銘　雪解（卯の斑釉湯呑茶碗）　三峰窯
昭和二十六年　径六・三、高九・五　松印

14
秩父宮雍仁親王殿下
大湯呑　銘　五輪（染付湯呑茶碗）　三峰窯
昭和二十五年　径七・五、高一〇・七　三峰窯印、初窯印

13　14

18
秩父宮雍仁親王殿下
茶碗　竹馬と子供
三峰窯
昭和二十六年
径一二・九、高台径六・三、
高七・九
三峰窯印

昭和二十六年十一月十一日に御殿場御別邸へ来邸されたタイ国チュンボット妃殿下とご一緒に、雍仁親王殿下が絵付けされた茶碗。御制作当日の様子は勢津子妃殿下の日記抄にも記されている（56頁参照）。成形は加藤土師萌が担当したと考えられる。『玉葉流芳』未収録作品。

裏

15

秩父宮雍仁親王殿下　栗鼠灰皿（大）　三峰窯

昭和二十五年　径一二・五、高一一・三

17

秩父宮雍仁親王殿下　熊谷草灰皿　三峰窯

昭和二十五年　径一二・二、高三・七

16

秩父宮雍仁親王殿下

栗鼠灰皿（小）　三峰窯

昭和二十六年

径一一・五、高九・一

19

秩父宮妃勢津子殿下
御歌染付湯呑茶碗　三峰窯
昭和二十五年
径七・五、高九・〇
三峰窯印、初窯印
秩父宮記念公園所蔵

妃殿下御歌
「わが庭にさけるもおなじ花ながら
　おもはづ手折る野路のしらぎく」
高台内に三峰窯と初窯の窯印がある。成形は加藤土師萌が担当したと考えられる。

裏

20

秩父宮妃勢津子殿下
鉄絵白釉香合　鶴
三峰窯
昭和二十五年頃
三・七×六・八×二・八
「勢」刻銘、菊印
秩父宮記念公園所蔵

21

秩父宮妃勢津子殿下
染付香合　兎
三峰窯
昭和三十八年
四・五×四・二×三・五
菊印
秩父宮記念公園所蔵

22

秩父宮妃勢津子殿下
鉄絵磁器水滴　鶉
三峰窯
昭和四十二年
三・七×六・四×四・〇
菊印
秩父宮記念公園所蔵

23

秩父宮妃勢津子殿下

鉄絵灰釉花瓶　三峰窯

御制作年不詳

径九・七、高一〇・〇

秩父宮記念公園所蔵

24

秩父宮妃勢津子殿下

卯の斑釉花瓶　三峰窯

御制作年不詳

径一二・八、高九・七

「勢」刻銘

秩父宮記念公園所蔵

25

秩父宮妃勢津子殿下

灰釉に天目釉掛分花瓶　三峰窯

昭和三十九年

径一二・四、高九・八

「勢」刻銘

秩父宮記念公園所蔵

26

秩父宮妃勢津子殿下

鉄絵薄雪草図花瓶　三峰窯

御制作年不詳

径八・七、高一一・二

「勢」刻銘

秩父宮記念公園所蔵

27

秩父宮妃勢津子殿下

伊羅保花瓶　三峰窯

御制作年不詳

径一二・〇、高一四・三

「勢」刻銘、菊印

秩父宮記念公園所蔵

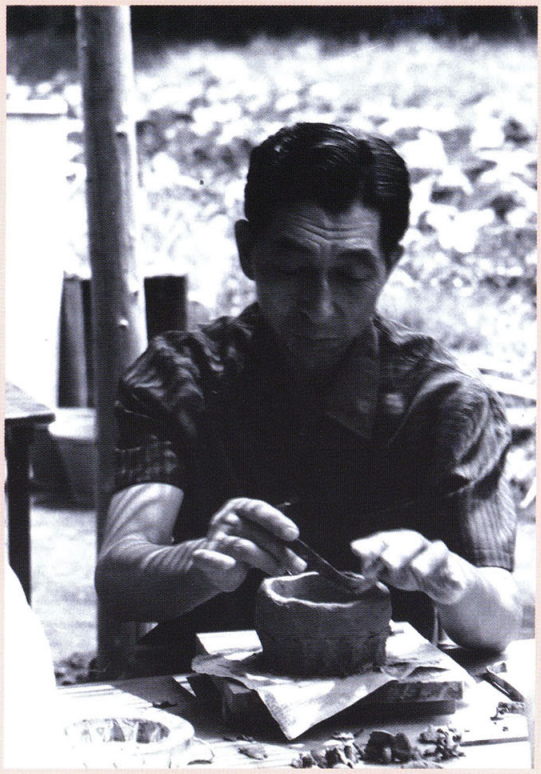
アルバム

三峰窯の思い出

―旧高松宮家―

加藤土師萌より轆轤の指導を受けられる宣仁親王殿下
（昭和31年7月29日）

茶碗を御制作中の宣仁親王殿下（昭和45年7月27日）



茶碗を御制作中の宣仁親王殿下
（昭和41年7月26日）

絵付けをされる喜久子妃殿下
（昭和41年8月9日）

《俎皿》（出品番号56）に御染筆される喜久子妃殿下
（昭和51年8月6日）

28

高松宮宣仁親王殿下

伊羅保茶碗　三峰窯

昭和三十一年

径一五・〇、高台径五・二、高六・〇

29

高松宮宣仁親王殿下

志野風茶碗　銘　梅花　三峰窯

昭和三十三年

径一二・三、高台径五・七、高七・八

「宣」鉄絵銘

御銘出典：

「春くれば宿にまづ咲く梅の花

君が千年のかざしとぞ見る」

古今和歌集　巻第七　賀歌　紀貫之

30 高松宮宣仁親王殿下
織部釉茶碗　三峰窯
昭和三十四年
径一四・五、高台径五・四、高七・五
不詳刻銘

31 高松宮宣仁親王殿下
黄瀬戸風茶碗　銘　行く春　三峰窯
昭和三十五年
径一三・七、高台径八・五、高八・八
「宣」刻銘

33 高松宮宣仁親王殿下
黒釉伊羅保茶碗　銘　朝雨　三峰窯
昭和三十八年
径一四・二、高台径六・〇、高六・六
「宣」刻銘

32

高松宮宣仁親王殿下

飴釉茶碗　銘　山里　三峰窯

昭和三十八年

径一〇・五、高台径六・九、高八・六

御銘出典：

「山里は冬ぞさびしさまさりける

人目も草もかれぬと思へば」

古今和歌集　巻第六　冬歌　源宗于朝臣

36

高松宮宣仁親王殿下

白釉瑠璃覆輪茶碗　銘　一声　三峰窯

昭和四十年

径一四・五、高台径五・〇、高六・二

御銘出典：

「夏の夜の臥すかとすればほととぎす

鳴くひとこゑに明くるしののめ」

古今和歌集　巻第三　夏歌　紀貫之

34 高松宮宣仁親王殿下
伊羅保茶碗　三峰窯
昭和三十九年
径一七・六、高台径六・五、高六・一

35 高松宮宣仁親王殿下
瑠璃釉茶碗　銘　老松　三峰窯
昭和四十年
径一二・〇、底径八・九、高一〇・〇

38 高松宮宣仁親王殿下
練上げ手茶碗　三峰窯
昭和四十二年
径一二・二、高台径八・五、高七・四

37

高松宮宣仁親王殿下

天目釉白覆輪茶碗　銘　歌名（夜やくらき）　三峰窯

昭和四十一年

径一四・七、高台径五・七、高六・三

御銘出典：

「夜やくらき道やまどへる郭公

わが宿をしもすぎかてに鳴く」

古今和歌集　巻第三　夏歌　紀友則

39

高松宮宣仁親王殿下

練上げ手茶碗　銘　夕月夜　三峰窯

昭和四十三年

径一三・八、高台径六・〇、高八・二

御銘出典：

「夕月夜をぐらの山に鳴く鹿の

声のうちにや秋は暮るらむ」

古今和歌集　巻第六　秋歌下　紀貫之

40

高松宮宣仁親王殿下

練上げ手茶碗　銘　天河　三峰窯

昭和四十三年

径一五・三、高台径五・三、高六・九

御銘出典：

「天の川紅葉を橋にわたせばや

七夕つめの秋をしも待つ」

古今和歌集　巻第四　秋歌上　読人知らず

43

高松宮宣仁親王殿下

伊羅保茶碗　銘　夏乃夜　三峰窯

昭和四十九年

径一六・〇、高台径五・七、高六・七

御銘出典：

「夏の夜はまだよひながら明けぬるを

雲のいづくに月やどるらむ」

古今和歌集　巻第三　夏歌　清原深養父

41 高松宮宣仁親王殿下
卯の斑釉茶碗　三峰窯
昭和四十四年
径一三・五、高台径八・〇、高八・九

42 高松宮宣仁親王殿下
天目釉茶碗（玳皮盞）　三峰窯
昭和四十五年
径一五・八、高台径四・八、高六・四

44 高松宮宣仁親王殿下
卯の斑釉平茶碗　銘　青苔　三峰窯
昭和四十九年
径一五・五、高台径四・八、高六・五

45 高松宮宣仁親王殿下
長石釉茶碗　銘　春雪　三峰窯
昭和五十一年
径一一・三、高台径六・五、高八・二
「宣」刻銘

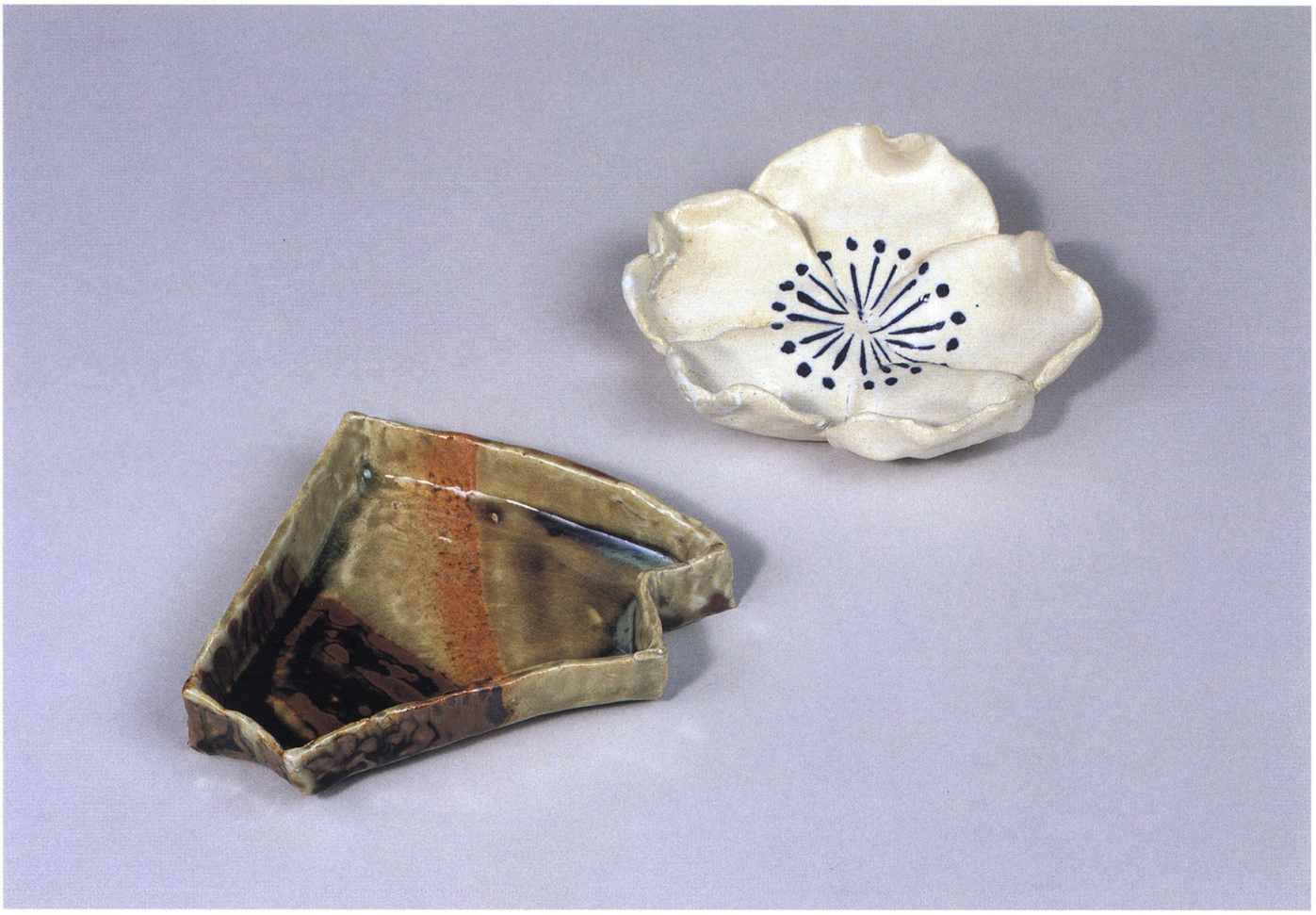
46 高松宮宣仁親王殿下
卯の斑釉茶碗　銘　喜雨　三峰窯
昭和五十一年
径一五・七、高台径六・四、高四・八

47 高松宮宣仁親王殿下
天目釉茶碗　銘　晩夏　三峰窯
昭和五十一年
径一五・四、高台径七・五、高六・三
「宣」刻銘

48 高松宮妃喜久子殿下
鉄絵白釉湯呑茶碗　三峰窯
昭和三十一年
径七・四、高台径三・六、高七・三

50 高松宮妃喜久子殿下
桜花形灰皿　三峰窯
昭和三十三年
一一・三×一三・五×三・五

49 高松宮妃喜久子殿下
鉄絵流灰釉織部掛け分向付　三峰窯
昭和三十三年
一一・五×一五・〇×二・二



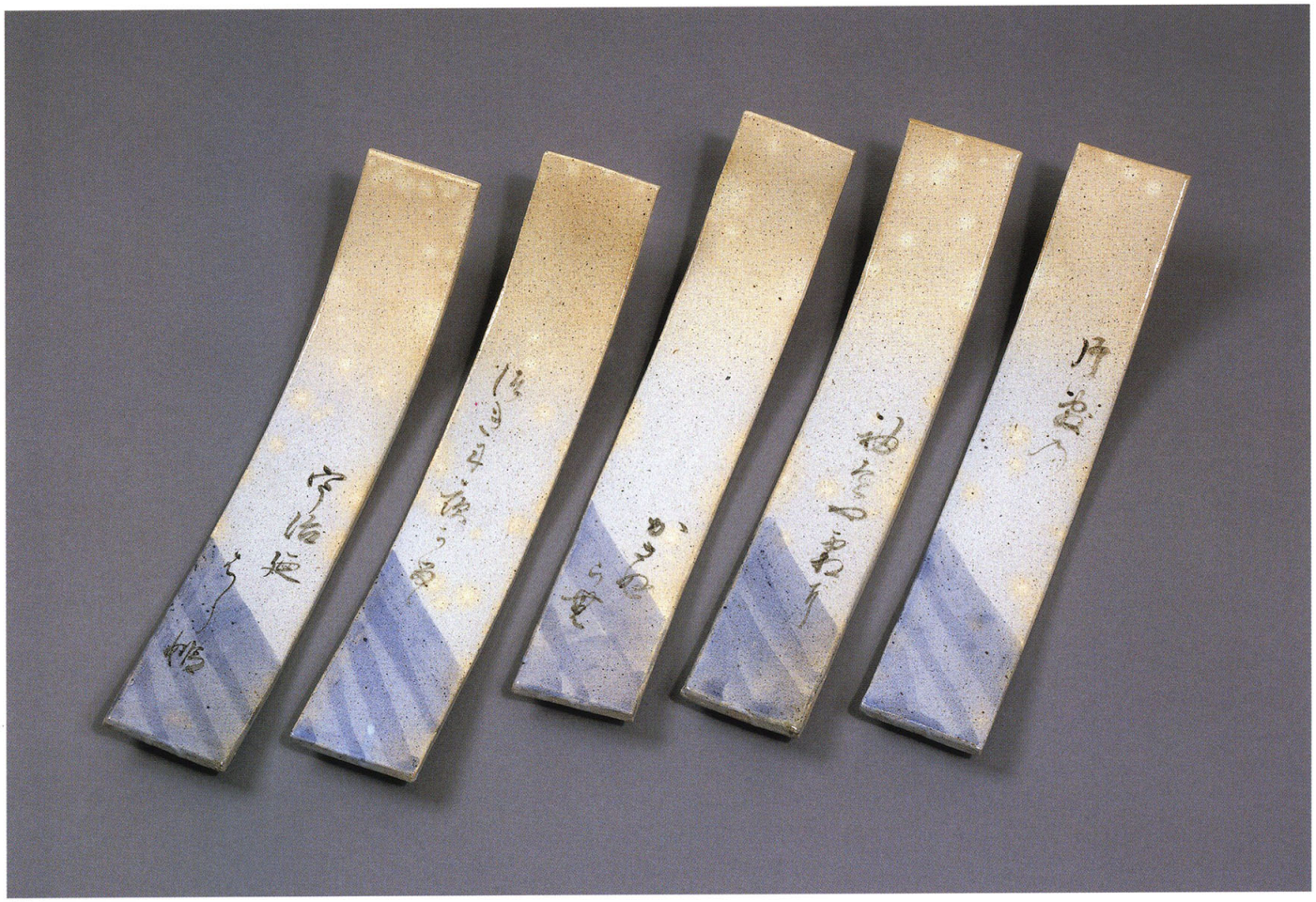
53 高松宮妃喜久子殿下
白磁紅葉文花瓶　三峰窯
昭和四十二年
径一一・五、高九・八

52 高松宮妃喜久子殿下
箸置　貝津くし　三峰窯
昭和三十八年
最大長約九・〇
「キク」刻銘

51 高松宮妃喜久子殿下
黄瀬戸風茶碗　三峰窯
昭和三十五年
径一三・四、高台径五・七、高六・七
撫子印

54 高松宮妃喜久子殿下
鉄絵白釉徳利、ぐい呑　三峰窯
昭和四十五年
（徳利）径八・七、高一〇・四
（ぐい呑）径五・〇、高五・〇
「喜」刻銘

55 高松宮妃喜久子殿下
鉄絵灰釉雀香合　三峰窯
昭和四十九年
五・五×九・四×五・二
「喜」鉄絵銘



橋姫

江南

56

高松宮妃喜久子殿下

俎皿　銘　橋姫、江南　三峰窯

昭和五十一年

各約三三・〇×六・五×七・五

「喜」刻銘

御銘出典(橋姫)：

「片敷きの袖をや霜にかさぬらむ

つきに夜かるる宇治のはし姫」

新古今和歌集　巻第六　冬歌　法印幸清

御銘出典(江南)：

「十月江南天気好　可憐冬景似春華」

白氏文集　巻二十　早冬　白居易

アルバム

三峰窯の思い出

―陶つくりの会のご様子―

窯の前で成形後の御作品を乾燥させているご様子（昭和41年7月26日）

三笠宮崇仁親王殿下（昭和42年7月27日）

秩父宮妃勢津子殿下と三笠宮妃百合子殿下
（昭和45年7月27日）

高松宮妃喜久子殿下と
常陸宮正仁親王殿下
（昭和41年7月26日）

高松宮妃喜久子殿下と常陸宮妃華子殿下、
近衛甯子様（三笠宮崇仁親王殿下第一女子）
（昭和41年7月26日）

〈三峰窯の窯印・銘印と箱書〉

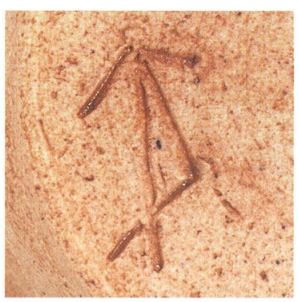
三峰窯の窯印はもともと加藤土師萌が考案したものである。名前の通り角枠のなかに三つの山型を組み合わせたデザインで、雍仁親王殿下や勢津子妃殿下の御作の一部や加藤の作品に押されている。殿下はその他に御自身の作であることを示すため、お印の若松に因む松葉をかたどった窯印を用いられた。また、妃殿下は「勢」の刻銘やお印の菊を用いられた。一方、宣仁親王殿下はあまり銘印を用いられなかったようであるが、一部の御作には「宣」の刻銘や鉄絵銘が見られる。喜久子妃殿下はお印の撫子をかたどったものや、「喜」の字をいくつかの書体で銘とされている。なお、「初」の印銘は、昭和二十五年に三峰窯に初めて火入れされた、初窯の作品のみに押されたと推測される、稀少なものである。

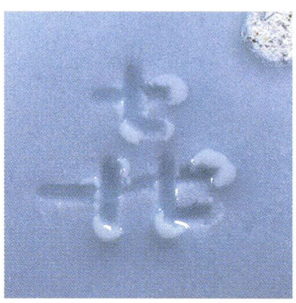
三峰窯の御作の特徴の一つとして、雍仁親王殿下の御作には勢津子妃殿下の箱書が、宣仁親王殿下の御作には喜久子妃殿下の箱書が添うことが挙げられる。勢津子妃殿下は蓋表に御銘だけを書かれており、喜久子妃殿下は蓋表に「宣仁親王御作」、蓋裏に御銘とお名前をしたためられている。ここではその一例を示し、併せて勢津子妃殿下が御銘「面影」(出品番号2)に因んで詠まれた御歌を、そして喜久子妃殿下が御銘「歌名(夜やくらき)」(出品番号37)の出典となった和歌を、それぞれ蓋裏にお書きになった箱書を紹介する。当館所蔵品に限れば、和歌が書かれた箱書は、わずかにこの二作品だけである。

初窯印

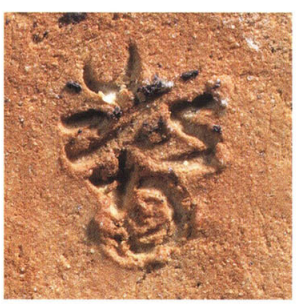
三峰窯窯印

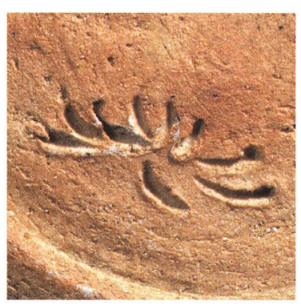
「宣」刻銘（宣仁親王殿下）


松印（雍仁親王殿下）


「喜」刻銘（喜久子妃殿下）

撫子印（喜久子妃殿下）


「勢」刻銘（勢津子妃殿下）


菊印（勢津子妃殿下）

出品番号2《茶碗　銘　面影（天目釉茶碗）》の箱書

蓋表

同右の蓋裏

妃殿下御歌
「ひたむきに　ろくろひかししおもかけの
手にとるやかて目にうかひくる
勢津子」

出品番号32《飴釉茶碗　銘　山里》の箱書

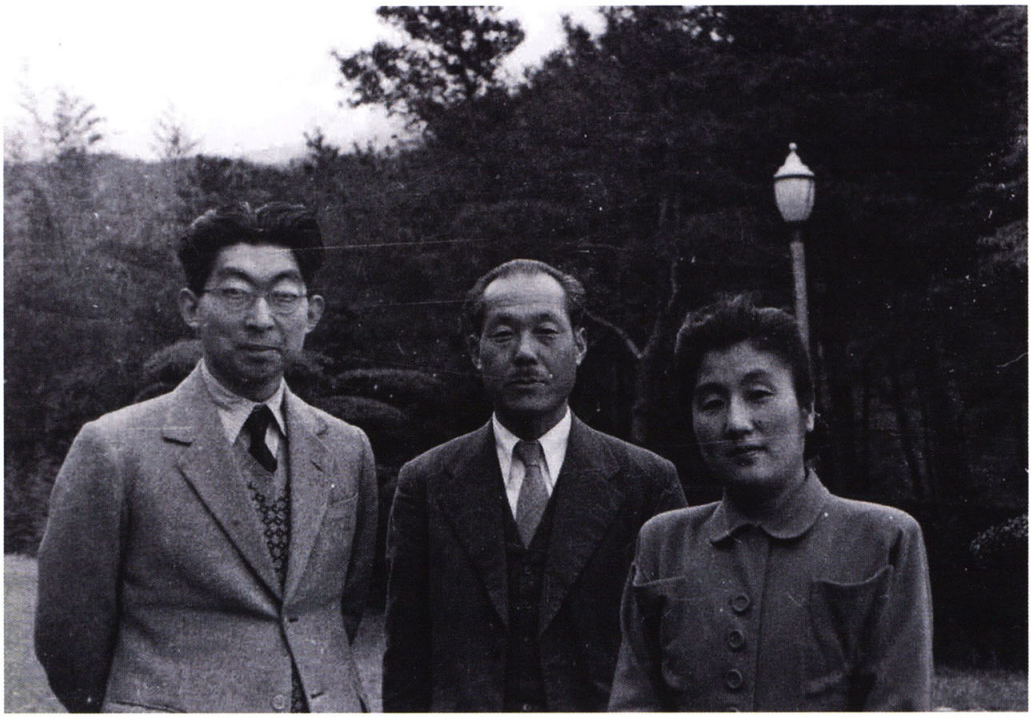
蓋表

同上の蓋裏

出品番号37《天目釉白覆輪茶碗　銘　歌名（夜やくらき）》の箱書

「夜やくらき　道やまどへるほととぎす
わが宿をしもすぎかてになく
喜久子」
（古今和歌集　巻第三　夏歌　紀友則）

加藤土師萌



秩父宮同妃両殿下と加藤土師萌（昭和25年4月24日、御殿場御別邸のお庭先で）

加藤土師萌は明治三十三年（一九〇〇）に愛知県春日井郡瀬戸町（現在の瀬戸市）で生まれた。尋常高等小学校を卒業後、地元の製陶業・千峰園に画工見習として就職、日野厚のもとで図案等を学び、大正五年（一九一六）、第四回農展図案部に初入選した。その後、愛知県立窯業学校の助手を経て、同十五年に岐阜県陶磁器試験場の技手として招かれ、瀬戸から多治見へ移住した。昭和二年（一九二七）、第八回帝展に美術工芸部が新設されるとたびたび入選を重ね、同五年第十一回帝展に出品した《葱文大皿》（出品番号65）が秩父宮殿下の御買上となった。同十年には岐阜県から陶業視察のため、中国、満洲、朝鮮に派遣され、翌年『支那・満鮮の陶業を視て』（日本陶磁器工業組合連合会）を上梓した。同十二年、パリ万国博覧会に《指描澤瀉文大皿》などを出品し、グランプリを受賞した。同十五年には横浜市日吉に移り住み、大倉和親（大倉陶園社長）の支援を受けて日吉窯を設立した。戦前戦後を通じて日本や中国の古陶磁の技法研究を深め、「黄地紅彩」、「萌葱金襴手」、「釉裏金彩」などの再現に成功、同三十六年に色絵磁器で重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された。戦後は日本伝統工芸展を中心に制作活動を続ける一方、同三十年から四十二年まで東京芸術大学美術学部教授を務め、後進の指導にもたずさわった。同四十三年に死去、勲三等瑞宝章受章。

57

加藤土師萌

鉄絵馬図茶碗　三峰窯

昭和二十五年

径一二・五、高台径五・八、高七・〇

三峰窯印、初窯印

秩父宮記念公園所蔵

本作は高台内に初窯の印銘が見られ、『玉葉流芳』に収められた次の記述と一致する作品である。「昔から初窯の作品で馬の絵の茶盌を用いると中風が起きぬなどといわれており、陶家では初窯には馬の絵の茶盌を焼く風習があるので、この三峯窯もそれに倣つて私が馬の繪の抹茶盌をいくつか作つた。」（「御自作と三峰窯の作品」）

裏

62

加藤土師萌

鉄絵渦文茶碗　三峰窯

昭和二十六年

径一一・〇、高台径五・六、高七・〇

三峰窯印

59

加藤土師萌

鉄絵松図小皿　三峰窯

昭和二十五年

径一二・〇、高二・八

三峰窯印、初窯印

秩父宮記念公園所蔵

60

加藤土師萌

鉄絵三峯小皿　三峰窯

昭和二十六、二十七年頃

径一一・六、高三・一

三峰窯印

秩父宮記念公園所蔵

58

加藤土師萌

瑠璃釉花文花瓶　三峰窯

昭和二十五年

径九・六、高二三・四

三峰窯印、初窯印

秩父宮記念公園所蔵

61

加藤土師萌

染付松文蓋付御飯茶碗　三峰窯

昭和二十六年　径一一・〇、高台径四・五、総高七・五

「三峯窯」染付銘　秩父宮記念公園所蔵

蓋

63

加藤土師萌

鉄絵磁器貝香合　三峰窯

昭和三十八年

五・五×五・八×三・三

64

加藤土師萌

瑠璃釉陶硯　三峰窯

昭和四十年

一〇・一×九・〇×二・〇

65　加藤土師萌
葱文大皿
昭和五年
径四一・三、高六・八

《葱文大皿》について

本作は昭和五年の第十一回帝展に出品され、十一月九日に細川護立の案内で同展を御覧になった雍仁親王殿下が、自らお選びになり買い上げられたものである。加藤土師萌が『玉葉流芳』のなかで「私と、殿下との御縁も作品の上からのことで、第十一回帝展出品の『葱文大皿』の御買上に始まる。」と自ら述べているように、殿下と陶芸家加藤土師萌のその後の御親交のきっかけとなった作品である。

殿下は本作を大変気に入られ、御殿場御別邸ではいつもマントルピースの上に置いて来訪者に自慢されていたと伝えられている（『加藤土師萌作品集』、朝日新聞社、昭和四十九年）。雍仁親王殿下が薨去された後、御遺愛の品として勢津子妃殿下より昭和天皇へ献上された。

66 加藤土師萌
陶板 狐
昭和二十九年頃
一一・八×二三・五

67 加藤土師萌
孔雀緑鳥文鉢
昭和三十二年
径三〇・〇、高一二・二

「民芸派」のやきもの

宮様方が古今のやきものに広く親しまれたことについては、本図録の巻頭概説でも触れた通りである。ところで、加藤土師萌が『玉葉流芳』のなかで述べた以下の一文は、三峰窯の性格を考える上で興味深い指摘である。

献上品は別として、(引用者註：雍仁親王殿下が)新陶で親しまれた諸作には、河井寛次郎、浜田庄司、富本憲吉など諸氏の作品が見受けられる。これは御殿場御別邸が人も知る故井上準之助氏の元別邸で、萱葺の民家風の建物で、内部の調度に方つては柳氏を始め民芸派の人々の手によつたことに基く点も多いと思われる。

秩父宮家の御殿場御別邸の建物はいまも秩父宮記念公園内に現存し、展示公開されている。文中にあるように、御別邸は元蔵相の男爵井上準之助の別荘だったもので、もともとは享保八年(一七二三)に御殿場市深沢に建てられた小宮山家の家屋を昭和二年に移築したものである。さりげない記述であるが、「民芸派」の人である「柳氏」、すなわち民芸運動の理論的指導者である柳宗悦が、御別邸の室内調度の準備や製作に関与していたことが指摘されている。御別邸では戦中戦後の食糧難を受けて、雍仁親王殿下は農業牧畜に取り組まれるなど、青年時代の御渡英の折に体験された英国貴族の本格的なカントリー・ライフの生活様式を応用して親しまれた。だが、それと同時に伝統的な日本の民家を住まいとされたことは、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動に共感を抱きつつ、日本国内の民間工芸品を再評価した、民芸運動同人の人々の生活態度との類似点を見出さないわけにはいかない。

秩父宮同妃両殿下が親しまれた河井寛次郎や濱田庄司の作品の一部は、当館だけでなく秩父宮記念公園にも引き継がれている。囲炉裏を囲んで和服でくつろがれる両殿下を撮影したお写真にも、お身の回りに彼らの作品を見ることができる。いずれも花生け、急須、湯呑み、莨入れなど、生活に密着した実際の日常で使われるやきものである。どっしりとした素朴な器で、都会的な洗練とは無縁の姿形である。加藤土師萌が三峰窯で制作した日用食器がこれらの姿に極めて近いのも、「民芸派」のやきものを両殿下が生活のなかでお使いになっていたことを意識していたからだろう。

河井寛次郎

河井寛次郎（一八九〇～一九六六）は島根県に生まれ、東京高等工業学校で窯業科学を学んだ後、大正三年（一九一四）に京都の五条坂に鐘渓窯を開いて独立後、中国古陶磁や朝鮮李朝陶磁を範とした多彩な作品を発表した。その後、柳宗悦らとの出会いから雑器の美に目覚め、技巧的な作風から簡素で力強い作風へと転換し、作陶を通じて民芸運動の実践的な活動を行った。昭和十二年（一九三七）にパリ万国博覧会では《鉄辰砂草花図壺》で、同三十二年にもミラノ・トリエンナーレで《白地草花絵扁壺》がグランプリを受賞するなど、国際的にも高い評価を得る作品を生み出した。

秩父宮妃勢津子殿下、河井寛次郎陶業四十年記念展にお成りの節
（昭和32年4月10日）

68
河井寛次郎
辰砂呉洲碗
昭和十五年
径一一・八、高台径五・三、高九・〇

70
河井寛次郎
呉洲辰砂花扁壺
昭和三十二年
径一四・五、高二〇・二

69
河井寛次郎
草花文湯呑
昭和十八年
各径九・〇、高七・二

濱田庄司

濱田庄司（一八九四～一九七八）は神奈川県に生まれ、東京高等工業学校を卒業後、同校先輩の河井寛次郎と同じく京都市立陶磁器試験場に入所した。富本憲吉やバーナード・リーチ、柳宗悦との知己を得て、大正九年（一九二〇）にリーチとともにイギリスへ渡り、セント・アイヴスで本格的な作陶活動を開始した。同十三年に帰国以後、栃木県益子に作陶の場を定め、柳や河井らとともに各地を訪れて民芸運動を推進した。昭和三十年（一九五五）に民芸陶器で重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された。同四十三年、文化勲章受章。

秩父宮妃勢津子殿下、濱田庄司窯にお成りの節
（昭和30年11月11日）

71　濱田庄司
鉄絵丸紋蓋物
昭和十年代
径一二・三、高一三・八

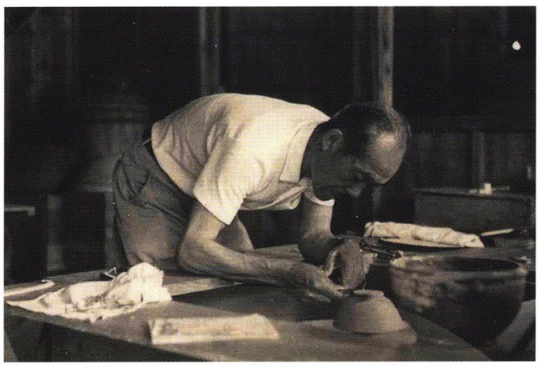
昭和十九年に雍仁親王殿下の御誕生祝いとして宣仁親王殿下より贈られたもの。

加藤土師萌と三峰窯

陶芸家加藤土師萌（明治三十三年～昭和四十三年）の活動は、図案制作を中心とした初期の瀬戸時代（大正十五年まで）、帝展に連続出品し陶芸家として認められた多治見時代（大正十五年～昭和十五年）、重要無形文化財保持者に認定され戦後陶芸界を代表する作家の一人となる日吉時代（昭和十五年～晩年）と、活動拠点の移転とともに大きく三期に分けられる。その中で三峰窯の創立は日吉時代に該当し、まさに加藤の作陶人生の最盛期と重なる業績と見なしえるものであった。しかしながら、三峰窯における創作活動は、加藤について論じられたこれまでの研究のなかでも、作品を始めとする具体的な詳細についてはほとんど言及される機会はなかった。本論では、前半で多治見時代までの活動を振り返り、後半では三峰窯の特色に焦点を当てて日吉時代を取り上げる。

瀬戸から多治見へ

加藤土師萌の陶歴は、出生地の瀬戸町立瀬戸第一尋常高等小学校を卒業後、大正三年に瀬戸町の製陶業千峰園の陶画工見習として始まる。元来、図画を得意とした加藤は、同園経営者より瀬戸にあった愛知県立陶器学校（のちの愛知県立窯業学校）図案科教諭の日野厚を紹介してもらい、日野の薫陶を受け図案家としての素地を固めていった。そして、瀬戸陶磁工商同業組合の図案技手、愛知県立窯業学校の実習助手などを務め、その傍ら農商務省主催図案及応用作品展（農展）図案部で入賞すると、その後は陶芸作品でも入選を果たすようになった。この頃、熱心に通いながらスケッチや研究を行っていた、名古屋にある愛知県商品陳列所所長の原文次郎から「土師萌（はじめ）」の雅号を与えられ、本名の「一（はじめ）」ではなく雅号を名乗るようになった。また、瀬戸時代には地元の製陶家の集まりである瀬戸図案研究会や瀬戸陶均会の理事を兼務するなど、加藤は図案家から陶芸家への転身を遂げ、ある一定の評価を得る存在になっていた。



三峰窯にて作陶する加藤土師萌（昭和25年7月23日）

続く多治見時代は、かねてから加藤の才能に注目していた岐阜県陶磁器試験場の初代場長井深捨吉により技手として迎えられ、大正十五年九月に瀬戸から多治見へと移ったことで幕を開けた。同試験場の主要な研究課題の一つは、輸出陶磁の研究であった。しかし、輸出陶磁と言っても、伊万里焼などの古陶磁研究を行ったわけではなく、同時代の欧米人が使用する洋食器の研究であった。具体的には、その洋食器の中に欧米人に好まれる日本趣味を盛り込む研究であり、そしてそれを多治見ほか美濃の製陶業者が現地の材料を用いていかに容易に商品化できるかを追求するものであった。もう一つの課題は、未発見の陶石、磁土、カオリンなど、製陶業に必要な原材料を美濃地方全域にわたって調査、応用試験することであった。加藤はこれらの研究を任されて、それぞれに優れた試作品を残した。輸出陶磁や原材料の研究は当時の商工省の工芸振興政策の一環で、輸出向けの産業陶芸の充実による新規市場の開拓は国家的課題となっていた。

加藤は試験場での研究業務を続けながら、その一方で昭和二年に新設された第八回帝展第四部（美術工芸部門）に二点の作品を入選させることに成功した。帝展入選の快挙は加藤の名を一躍当地の陶芸界に広めることになった。農展や商工省展での入選成果があったとはいえ、地方の陶磁器試験場の一技師にすぎなかった加藤が、伊東陶山や河村蜻山、楠部彌弓ら伝統ある京都の陶芸家や、すでに高い名声を得ていた板谷波山などと互角に入選を果たしたのである。以後、加藤は昭和十一年の改組帝展第一回展まで九回連続の入選を続け、瀬戸・美濃地方を代表する陶芸家の地位を築いていった。この間の同五年、第十一回帝展に出品した《葱文大皿》（出品番号65）は秩父宮雍仁親王殿下が買い上げられた。大胆に意匠化された葱の図様、その葱の輪郭をぼかすように淡い結晶釉が掛け合わされた、高い装飾性を見せる大皿の優品であった。茎や葉を直線主体の図様としている点で、《葱文大皿》には欧米を中心に流行していたアール・デコ様式への意識が見られ、加藤の図案家としての豊かな感性を示す作品である。

三峰窯の創立の要因とも関係する点であるが、陶磁器試験場の技師であった加

藤がこれだけの活躍ができた背景には、周囲の理解があったことはもちろんだが、やはり試験場の仕事を通じて陶芸家に必要な知識や技術を習得していったことが挙げられる。まず、初期に図案家として出発した経歴からわかるように、輸出向けの産業陶芸に携わりつつも、帝展出品作のような美術工芸品も柔軟に発想できるデザイナーとしての能力に恵まれていた。次に、図案の考案だけでなく、デザインを試作品にまで仕上げる能力を有していた、つまり自分の思い通りの作品を作ることができる技術も身に付けていた（ただし、成形に関しては多治見時代までは当地の習慣に従い轆轤職人に依頼していたと伝えられている）。そして、陶磁器試験場では各種の材料研究にも取り組んでいたため、思い描いた作品を作るために最適の材料を選択できる知識も備えていた。最終的には、これらを総合的にまとめて一つの作品を作り上げる構想力があった点で、加藤は能力的に一介の技師とは明らかに異なる存在であった。陶磁制作全般に関わる知識、図案を得意とする美術的なセンスなど、この多治見時代に加藤は優れた陶芸家が備えるべき能力を余すところなく身に付けていたと言えるだろう。

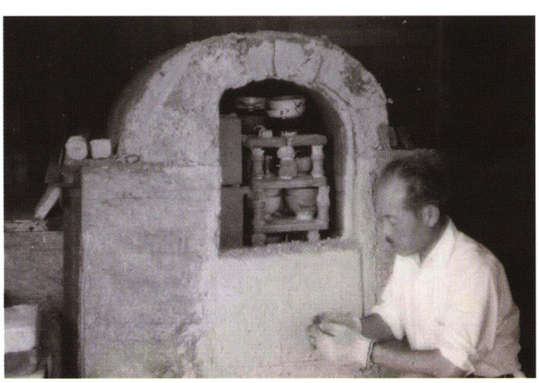
多治見時代の興味深いエピソードの一つとして、昭和十年に陶業視察のため中国、朝鮮半島へ岐阜県から派遣された一件がある。それは、わずか約四十日間で上海をはじめとする中国南部、中国東北部（旧満洲）、朝鮮半島をまわり、各地の陶業事情を調査し、その他に広州を中心とした古窯址を訪ねるという過酷な旅程の視察行であった。当時、上海では「中国芸術国際展覧会」が開催されて、宋、元、明、清時代の古陶磁の名品が一堂に展示されていたが、加藤はここで初めて中国陶磁との本格的な出会いを果たした。加藤は帝展出品作の早い段階で中国陶磁的な技巧性の高い作風を打ち出しているが、この体験が改めて与えた影響は大きかっただろう。しかし、この視察の名目は、純粋な古陶磁鑑賞が目的ではなく、日本の製陶業を脅かしつつあった、現地の新設磁器工場の実態を調査することであった。帝展出品作家としてすでに一家をなしていた加藤であったが、日本陶磁器工業組合の依頼に応えようとする義務感と試験場技師としての使命感により、視察目的を達成すべく調査を完遂し詳細な報告書を作成した。その成果は翌十一年に『支那・満鮮の陶業を視て』と題して日本陶磁器工業組合連合会から出版された。このようなおよそ陶芸家らしくない仕事さえも、いとわずに遂行できるところが、「生真面目」、「誠実」、「知的」といった言葉とともに語られる加藤の真骨頂であった。とはいえ、この何事も疎かにしない几帳面な性格こそ、三峰窯の築窯から実際の制作指導までを担当する人物には最も必要とされたものではなかったのだろうか。加藤土師萌という陶芸家を考える上で、作品から受ける印象とともに、このような人物像を彷彿とさせる逸話は貴重な材料を提供してくれる。

その後、加藤は同十二年のパリ万国博覧会に《指描澤瀉文大皿》などを出品してグランプリを受賞、翌年は台湾総督府の委嘱により台湾全島を視察して陶業指導を行った。まだ陶磁器試験場には技師としてとどまっていたが、もはや日本を代表する陶芸家の一人として確固たる地位を築いていた。この年、中国北部・済南へ出征し、翌年の復職後、多治見時代は幕を閉じる。

陶磁器試験場に復職した加藤は独立を決意し、かつての師であった日野厚が勤める大倉陶園社長の大倉和親の支援を受けて、昭和十五年に横浜・日吉に移り住んだ。そこに日吉窯を設立すると、翌年には服部時計店で初の個展を開いた。また、東京美術学校の敷地内にあった文部省工芸技術講習所の嘱託となり実技指導、学科を担当することになった。戦局が悪化するにつれて制作機会は徐々に縮小し、同十九年まで展覧会への出品を行ったが、翌年にはとうとう窯を閉じることとなった。

三峰窯と戦後の日吉時代

ここからは、戦後の日吉時代と同時代の活動でありながら、これまであまり詳細にふれられてこなかった、三峰窯における加藤の果たした役割やその作品について述べてゆく。『玉葉流芳』によれば、三峰窯創立の発端は、貞明皇后の御誕生祝いの品として秩父宮雍仁親王殿下が依頼された急須を届けた加藤が、殿下から作陶のご希望を伺ったことに始まる。楽焼ではなく本焼窯をというご希望を受け、加藤は古来の窯の長所を取り入れた最も小型の本焼窯を設計した。次ページの設計図面（秩父宮記念公園所蔵）は、加藤自身が作成したと推測されるものである。薪材窯とし、従来の登り窯の長所と倒炎式単室窯（炎を窯の内部で上昇させて天井近くで反転させて窯床にある煙道へ下げる構造をもつ）を折衷して、少数の作品を迅速に焼成することをねらいに作られた。独自の設計による窯の考案は、長年の試験場時代の研究、作陶のほとんどの工程を一人で行ったと伝えられる日吉窯での経験が少なからず生かされていると見てよいだろう。また、設計だけでなく実際の築造も、二人の左官屋に目地やその他に必要なモルタルをこねさせただけで、単純な箇所以外は四日間かけて加藤が一人で全て作り上げた。築窯に関する詳細については、後掲の『玉葉流芳』本文再録を参照していただきたい。宮様のために特別



三峰窯にて窯出しをする加藤土師萌（昭和31年9月6日）

「倒焔式陶器焼成窯之圖（縮尺十分ノ一）」（秩父宮記念公園所蔵）

に設計された窯ではあるが、窯及び作品が現存し、かつ人間国宝となった陶芸家が設計から築造にいたるまでを記した文書資料を残している点でも、三峰窯は一級の文化財的価値を持つものと言えるだろう。

さて、三峰窯における加藤の創作活動であるが、まずその性格上、事前にじっくりと構想を練った作品のための窯ではない点を、前提として考える必要がある。そうしなければ、「典雅優美」とも称される構築性の高い数々の優品に比べて、それとは対照的に実用性の高い小品を主とした、三峰窯の作品の面白さを理解することは出来ないからである。

本展出品作のなかから三峰窯作品の特徴を挙げてゆくならば、初期はひたすらに日常の器を作ることに徹している点を指摘できる。それは両殿下の御作だけでは一窯分にはとても満たないので、加藤が「主として邸内で御使用になるものを目標として、その都度両殿下から御希望のものを伺つて作つた」からであった(『玉葉流芳』)。《鉄絵松図小皿》(出品番号59)、《鉄絵三峯小皿》(出品番号60)は、秩父宮記念公園にそれぞれ十数点ずつの組で残っているもので、一点だけを取り出してみても、シンプルではあるが深い魅力をたたえた作品である。簡略化された図柄を短時間で素早く大量にこなしていったことが想像され、加藤の作ったなかでも最も民芸寄りと言える作品である。《染付松文蓋付御飯茶碗》(出品番号61)も十一点が共箱に収められて現存するが、「三峯窯」という染付銘がなければ三峰窯の製品だとは思えないほど、磁器として高い完成度を見せている。これは雍仁親王殿下が同様に磁器に挑戦された《茶碗　銘　母衣》(出品番号3)と同じ昭和二十六年の窯で焼成されたもので、初窯からわずか二年目、すなわち二回目の窯で陶器と磁器の両方を失敗せずに焼き上げたのである。この二点の作品から、加藤が作った窯がいかに機能的で、欠陥の少ない理想的な仕上がりであったかが理解できる。《瑠璃釉花文花瓶》(出品番号58)は初窯時のもので、総体に失透ぎみの瑠璃釉を掛けた、加藤の三峰窯作品としては珍しい花器である。見込みの使用痕を見ると、実際に御別邸でお使いになっていた様子である。茶碗を見ると、《鉄絵馬図茶碗》(出品番号57)は『玉葉流芳』で加藤が述べているように、初窯の縁起物として作られたので他とはやや異なる意味を持つ作品であるが、唐津風の茶碗に手慣れた筆さばきで二頭の馬を描いたものである。《鉄絵渦文茶碗》(出品番号62)は、昭和二十六年の窯出しの様子を撮影した写真のなかに見つけることができるもので、加藤の挽いた轆轤らしいふっくらとした姿が特徴である。鉄絵による渦文も加藤の絵付けと推定するが、これほど単純な文様は加藤の作品にはほとんど見られず、殿下あるいは妃殿下が描かれた可能性も考えられる。雍仁親王殿下薨去後、大勢の人々が参加した「三峰窯陶つくりの会」の頃になると、加藤はもっぱら制作指導の方に回ることが多かったらしく、自身の作も日常の器から離れて遊び心のある趣味的な作品をわずかに作るだけとなった。高松宮家が所蔵されていた《鉄絵磁器貝香合》(出品番号63)、《瑠璃釉陶硯》(出品番号64)は、どちらもその当時の作品で、手間をかけた凝った作風ではないが、造形や色遣いに洗練された品格の高さが感じられるものである。後述するように、陶芸界の重責を背負って神経を張り詰めた制作を続けていた加藤にとって、三峰窯での創作活動はわずかに緊張を解くことのできる、貴重な機会だったのではないだろうか。

戦後の加藤は、戦前に美濃の古窯趾において収集した陶片研究に基づく織部焼の再現や学術的な著作の発表、そして数年にわたる地道な研究を続けた結果、黄地紅彩、萌葱金襴手などそれまで至難と考えられていた中国陶磁の古典技法に関する画期的な業績を残した。古陶磁研究を重視する姿勢は日本工芸会設立への参画や、日本伝統工芸展への出品にもうかがわれ、昭和三十六年には色絵磁器で重要無形文化財保持者に認定された。その翌年には正倉院御物調査員に任命され、正倉院三彩が日本製であることを実証した。その一方で、同三十年から四十二年にかけて東京芸術大学美術学部教授として後進の指導に当たり、制作と教育の両面で陶芸界の発展に貢献した。

こうした厳しい制作態度を貫いた加藤の集大成としての仕事が、現在、皇居宮殿竹の間に飾られている《萌葱金襴手菊文蓋付大飾壺》(挿図参照)の制作であった。自らが再現に成功した萌葱金襴手を、未だかつて誰も試みたことのない高さ一五〇センチの大壺にほどこす、我が国の陶磁史上にも類を見ない作品である。結局、加藤は次々と発生する課題に文字通り粉骨砕身して取り組むなか体調を崩し、完成を目にすることなく死去した。「夢幻の中にはもっと素晴しい畢世の傑作を描いていたが所詮は実力以外、何物も顕現出来なかった」(「新皇居第一儀礼室(謁見之間)に飾られる大飾壺謹作工程の概要」、『偲ふ　加藤土師萌追悼文集』昭和四十四年)と、最後まで謹厳実直な姿勢を崩さなかったが、出来上がった《萌葱金襴手菊文蓋付大飾壺》の威容が示すごとく、その実力はおよそ凡百の陶芸家をはるかに凌ぐものであった。

《萌葱金襴手菊文蓋付大飾壺》 昭和43年

岡本隆志(おかもと たかし／当館学芸室研究員)

資料

陶器問答

以下は、秩父宮御遺作図録『玉葉流芳』に掲載された、秩父宮雍仁親王殿下の御遺稿を再録したものである。再録に当たって、旧字の一部を新字に改めたほか、明らかに誤植と思われる部分は適宜訂正を行った。

○○「此度陶器をお始めになつたそうですが、全く驚きました。」

僕「何も驚くことはないぢやないか。陶器をやくと云えばすぐ芸術的作品を連想されるかも知れないが、僕が今やつているのは幼稚園や小学校でこねまわした粘土細工と大差ないのだからね。」

○○「然しロクロはむづかしいでしよう。」

僕「ナーニ、あれも一寸コツをのみこめば案外なものだ。現に僕でも二、三回で茶碗らしいものがともかく出来たからね。尤も二つ同じものを作つてくれと云われてもそうはいかんが・・・一つ一つがまさに天下一品と云うわけさ」

○○「陶器は趣味としては最高のもので色々のことをして最後に到達するものだと聞いていますが・・・」

僕「世間ではそう云うようだね。だが此頃流行の発掘で出て来るものは土器で、彌生式だとか、縄紋式だとかね。土をこねて日常使う器具を作ることは非常にプリミティブな頃からあつたわけだろう。絵らしい絵もなく、勿論文字などない頃から。だから絵もかけなければ、書もかけず、又茶の湯も知らない僕が陶器に手を出したからと云つてあきれられもしまい。造形から始めて他に及ぶことはおかしいどころかむしろ文化発達の道順だとさえ思うね。然し此の説の支持者はどうも余りなさそうだが・・・。それはそうとして、僕のは肝心の窯は先生まかせなんだから冗談にも自分で陶器をやくなんてまだ云えたものぢやないよ。」

この「陶器問答」は御生前、陶器をおはじめになつた事をききつけて御作品について或雑誌にのせたいと或人から申して来た時「そんな、人に見せるものなんか出来るもんか」と、早々におことわりになつたあとで書きふるしの原稿用紙の裏に鉛筆でおかきになつたものである。

出品目録

会期：平成二十一年一月六日（火）～三月八日（日）

出品番号	作者		作品名	制作年	点数	寸法	所蔵
1	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	茶碗　銘　裾野春（黄瀬戸青織部覆輪茶碗）	昭和二十七年	一点	径一二・七、高台径六・八、高六・七	宮内庁三の丸尚蔵館
2	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	茶碗　銘　面影（天目釉茶碗）	御制作年不詳	一点	径一二・〇、高台径五・二、高七・七	宮内庁三の丸尚蔵館
3	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	茶碗　銘　母衣（染付鉄絵熊谷草図茶碗）	昭和二十六年	一点	径一〇・五、高台径五・五、高七・七	宮内庁三の丸尚蔵館
4	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	茶碗　銘　冬籠（白釉茶碗）	昭和二十六年	一点	径一二・三、高台径五・八、高一二・三	宮内庁三の丸尚蔵館
5	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	茶碗　銘　若竹（青織部釉茶碗）	御制作年不詳	一点	径一一・二、高台径七・〇、高七・五	宮内庁三の丸尚蔵館
6	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	茶碗　銘　つゝ鳥（黄瀬戸風茶碗）	昭和二十六年	一点	径一一・四、高台径六・一、高八・四	宮内庁三の丸尚蔵館
7	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	茶碗　銘　紅富士（志野風茶碗）	御制作年不詳	一点	径一一・六、高台径六・三、高六・七	宮内庁三の丸尚蔵館
8	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	茶碗　銘　不二月（卯の斑釉茶碗）	昭和二十六年	一点	径一一・五、高台径六・四、高八・八	宮内庁三の丸尚蔵館
9	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	茶碗　銘　瑞光（黄飴釉茶碗）	昭和二十七年	一点	径一一・五、高台径六・八、高七・三	宮内庁三の丸尚蔵館
10	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	汲出茶碗　銘　残照（飴釉汲出茶碗）	昭和二十五年	一点	径九・〇、高七・〇	宮内庁三の丸尚蔵館
11	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	汲出茶碗　銘　野分（黄伊羅保釉汲出茶碗）	昭和二十五年	一点	径八・五、高六・〇	宮内庁三の丸尚蔵館
12	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	汲出茶碗　銘　牧場（青織部釉汲出茶碗）	昭和二十五年	一点	径九・〇、高六・二	宮内庁三の丸尚蔵館
13	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	湯呑　銘　雪解（卯の斑釉湯呑茶碗）	昭和二十六年	一点	径六・三、高九・五	宮内庁三の丸尚蔵館
14	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	大湯呑　銘　五輪（染付湯呑茶碗）	昭和二十五年	一点	径七・五、高一〇・七	宮内庁三の丸尚蔵館
15	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	栗鼠灰皿（大）	昭和二十五年	一点	径一二・五、高一一・三	宮内庁三の丸尚蔵館
16	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	栗鼠灰皿（小）	昭和二十六年	一点	径一一・五、高九・一	宮内庁三の丸尚蔵館
17	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	熊谷草灰皿	昭和二十五年	一点	径一二・二、高三・七	宮内庁三の丸尚蔵館
18	秩父宮雍仁親王殿下	三峰窯	茶碗　竹馬と子供	昭和二十六年	一点	径一二・九、高台径六・三、高七・九	宮内庁三の丸尚蔵館
19	秩父宮妃勢津子殿下	三峰窯	御歌染付湯呑茶碗	昭和二十五年	一点	径七・五、高九・〇	秩父宮記念公園
20	秩父宮妃勢津子殿下	三峰窯	鉄絵白釉香合　鶴	昭和二十五年頃	一点	三・七×六・八×二・八	秩父宮記念公園
21	秩父宮妃勢津子殿下	三峰窯	染付香合　兎	昭和三十八年	一点	四・五×四・二×三・五	秩父宮記念公園
22	秩父宮妃勢津子殿下	三峰窯	鉄絵磁器水滴　鶉	昭和四十二年	一点	三・七×六・四×四・〇	秩父宮記念公園

23	秩父宮妃勢津子殿下	三峰窯	鉄絵灰釉花瓶	御制作年不詳	一点	径九・七、高一〇・〇	秩父宮記念公園
24	秩父宮妃勢津子殿下	三峰窯	卯の斑釉花瓶	御制作年不詳	一点	径一二・八、高九・七	秩父宮記念公園
25	秩父宮妃勢津子殿下	三峰窯	灰釉に天目釉掛分花瓶	昭和三十九年	一点	径一二・四、高九・八	秩父宮記念公園
26	秩父宮妃勢津子殿下	三峰窯	鉄絵薄雪草図花瓶	御制作年不詳	一点	径八・七、高一一・二	秩父宮記念公園
27	秩父宮妃勢津子殿下	三峰窯	伊羅保花瓶	御制作年不詳	一点	径一二・〇、高一四・三	秩父宮記念公園
28	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	伊羅保茶碗	昭和三十一年	一点	径一五・〇、高台径五・二、高六・〇	宮内庁三の丸尚蔵館
29	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	志野風茶碗　銘　梅花	昭和三十三年	一点	径一二・三、高台径五・七、高七・八	宮内庁三の丸尚蔵館
30	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	織部釉茶碗	昭和三十四年	一点	径一四・五、高台径五・四、高七・五	宮内庁三の丸尚蔵館
31	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	黄瀬戸風茶碗　銘　行く春	昭和三十五年	一点	径一三・七、高台径八・五、高八・八	宮内庁三の丸尚蔵館
32	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	飴釉茶碗　銘　山里	昭和三十八年	一点	径一〇・五、高台径六・九、高八・六	宮内庁三の丸尚蔵館
33	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	黒釉伊羅保茶碗　銘　朝雨	昭和三十八年	一点	径一四・二、高台径六・〇、高六・六	宮内庁三の丸尚蔵館
34	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	伊羅保茶碗	昭和三十九年	一点	径一七・六、高台径六・五、高六・一	宮内庁三の丸尚蔵館
35	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	瑠璃釉茶碗　銘　老松	昭和四十年	一点	径一二・〇、底径八・九、高一〇・〇	宮内庁三の丸尚蔵館
36	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	白釉瑠璃覆輪茶碗　銘　一声	昭和四十年	一点	径一四・五、高台径五・〇、高六・二	宮内庁三の丸尚蔵館
37	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	天目釉白覆輪茶碗　銘　歌名（夜やくらき）	昭和四十一年	一点	径一四・七、高台径五・七、高六・三	宮内庁三の丸尚蔵館
38	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	練上げ手茶碗	昭和四十二年	一点	径一二・二、高台径八・五、高七・四	宮内庁三の丸尚蔵館
39	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	練上げ手茶碗　銘　夕月夜	昭和四十三年	一点	径一三・八、高台径六・〇、高八・二	宮内庁三の丸尚蔵館
40	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	練上げ手茶碗　銘　天河	昭和四十三年	一点	径一五・三、高台径五・三、高六・九	宮内庁三の丸尚蔵館
41	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	卯の斑釉茶碗	昭和四十四年	一点	径一三・五、高台径八・〇、高八・九	宮内庁三の丸尚蔵館
42	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	天目釉茶碗（玳皮盞）	昭和四十五年	一点	径一五・八、高台径四・八、高六・四	宮内庁三の丸尚蔵館
43	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	伊羅保茶碗　銘　夏乃夜	昭和四十九年	一点	径一六・〇、高台径五・七、高六・七	宮内庁三の丸尚蔵館
44	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	卯の斑釉平茶碗　銘　青苔	昭和四十九年	一点	径一五・五、高台径四・八、高六・五	宮内庁三の丸尚蔵館
45	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	長石釉茶碗　銘　春雪	昭和五十一年	一点	径一一・三、高台径六・五、高八・二	宮内庁三の丸尚蔵館
46	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	卯の斑釉茶碗　銘　喜雨	昭和五十一年	一点	径一五・七、高台径六・四、高四・八	宮内庁三の丸尚蔵館
47	高松宮宣仁親王殿下	三峰窯	天目釉茶碗　銘　晩夏	昭和五十一年	一点	径一五・四、高台径七・五、高六・三	宮内庁三の丸尚蔵館

48	高松宮妃喜久子殿下	三峰窯	鉄絵白釉湯呑茶碗	昭和三十一年	一点	径七・四、高台径三・六、高七・三	宮内庁三の丸尚蔵館
49	高松宮妃喜久子殿下	三峰窯	鉄絵流灰釉織部掛け分向付	昭和三十三年	一点	一一・五×一五・〇×二・二	宮内庁三の丸尚蔵館
50	高松宮妃喜久子殿下	三峰窯	桜花形灰皿	昭和三十三年	一点	一一・三×一三・五×三・五	宮内庁三の丸尚蔵館
51	高松宮妃喜久子殿下	三峰窯	黄瀬戸風茶碗	昭和三十五年	一点	径一三・四、高台径五・七、高六・七	宮内庁三の丸尚蔵館
52	高松宮妃喜久子殿下	三峰窯	箸置　貝津くし	昭和三十八年	一一点	最大長約九・〇	宮内庁三の丸尚蔵館
53	高松宮妃喜久子殿下	三峰窯	白磁紅葉文花瓶	昭和四十二年	一点	径一一・五、高九・八	宮内庁三の丸尚蔵館
54	高松宮妃喜久子殿下	三峰窯	鉄絵白釉徳利、ぐい呑	昭和四十五年	二点	（徳　利）径八・七、高一〇・四 （ぐい呑）径五・〇、高五・〇	宮内庁三の丸尚蔵館
55	高松宮妃喜久子殿下	三峰窯	鉄絵灰釉雀香合	昭和四十九年	一点	五・五×九・四×五・二	宮内庁三の丸尚蔵館
56	高松宮妃喜久子殿下	三峰窯	俎皿　銘　橋姫、江南	昭和五十一年	六点	各約三三・〇×六・五×七・五	宮内庁三の丸尚蔵館
57	加藤土師萌	三峰窯	鉄絵馬図茶碗	昭和二十五年	一点	径一三・五、高台径五・八、高七・〇	秩父宮記念公園
58	加藤土師萌	三峰窯	瑠璃釉花文花瓶	昭和二十五年	一点	径九・六、高一三・四	秩父宮記念公園
59	加藤土師萌	三峰窯	鉄絵松図小皿	昭和二十五年	一点	径一二・〇、高二・八	秩父宮記念公園
60	加藤土師萌	三峰窯	鉄絵三峯小皿	昭和二十六、二十七年頃	一点	径一一・六、高三・一	秩父宮記念公園
61	加藤土師萌	三峰窯	染付松文蓋付御飯茶碗	昭和二十六年	一点	径一一・〇、高台径四・五、総高七・五	秩父宮記念公園
62	加藤土師萌	三峰窯	鉄絵渦文茶碗	昭和二十六年	一点	径一一・〇、高台径五・六、高七・〇	宮内庁三の丸尚蔵館
63	加藤土師萌	三峰窯	鉄絵磁器貝香合	昭和三十八年	一点	五・五×五・八×三・三	宮内庁三の丸尚蔵館
64	加藤土師萌	三峰窯	瑠璃釉陶硯	昭和四十年	一点	一〇・一×九・〇×二・〇	宮内庁三の丸尚蔵館
65	加藤土師萌		葱文大皿	昭和五年	一点	径四一・三、高六・八	宮内庁三の丸尚蔵館
66	加藤土師萌		陶板　狐	昭和二十九年頃	一点	一一・八×二三・五	宮内庁三の丸尚蔵館
67	加藤土師萌		孔雀緑鳥文鉢	昭和三十二年	一点	径三〇・〇、高一二・二	宮内庁三の丸尚蔵館
68	河井寛次郎		辰砂呉洲碗	昭和十五年	一点	径一一・八、高台径五・三、高九・〇	宮内庁三の丸尚蔵館
69	河井寛次郎		草花文湯呑	昭和十八年	二点	各径九・〇、高七・二	宮内庁三の丸尚蔵館
70	河井寛次郎		呉洲辰砂花扁壺	昭和三十二年	一点	径一四・五、高二〇・二	宮内庁三の丸尚蔵館
71	濱田庄司		鉄絵丸紋蓋物	昭和十年代	一点	径一二・三、高一三・八	宮内庁三の丸尚蔵館

謝辞

本展覧会の開催準備にあたり、次の機関、皆様に御協力をいただきました。また、各作家の御遺族の方々にも御協力をいただきました。ここに記して御礼申し上げます。

御殿場市、秩父宮記念公園
木田拓也、佐藤進、鈴木真弓、相馬万里子、田代圭一、根上博、
平井督人、山口峯生

（敬称略、順不同）

三峰窯の思い出―宮様とやきもの
三の丸尚蔵館展覧会図録No.48

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十一年一月六日発行

©2009, The Museum of the Imperial Collections

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

三峰窯の思い出―宮様とやきもの
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 48

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十一年一月六日発行

©2009, The Museum of the Imperial Collections

Tea bowl with Tenmoku glaze named "Banka"
1976
d.15.4, base d.7.5, h.6.3
Sannomaru Shozokan

48
Princess Takamatsu Kikuko
Mitsumine-gama Kiln
Tea cup with iron painting on white glaze
1956
d.7.4, base d.3.6, h.7.3
Sannomaru Shozokan

49
Princess Takamatsu Kikuko
Mitsumine-gama Kiln
Dish with Oribe glaze on ash glaze and iron painting
1958
11.5 × 15.0 × 2.2
Sannomaru Shozokan

50
Princess Takamatsu Kikuko
Mitsumine-gama Kiln
Cherry blossom shaped ash tray
1958
11.3 × 13.5 × 3.5
Sannomaru Shozokan

51
Princess Takamatsu Kikuko
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl in Kizeto style
1960
d.13.4, base d.5.7, h.6.7
Sannomaru Shozokan

52
Princess Takamatsu Kikuko
Mitsumine-gama Kiln
Set of chopstick rests in various shell shapes
1963
longest length approx. 9.0
Sannomaru Shozokan

53
Princess Takamatsu Kikuko
Mitsumine-gama Kiln
Vase with maple design with white glaze
1967
d.11.5, h.9.8
Sannomaru Shozokan

54
Princess Takamatsu Kikuko
Mitsumine-gama Kiln
Sake bottle and cup with white glaze and iron painting
1970
Sake bottle d.8.7, h.10.4, cup d.5.0, h.5.0
Sannomaru Shozokan

55
Princess Takamatsu Kikuko
Mitsumine-gama Kiln
Sparrow shaped incense caddy with ash glaze and iron painting
1974
5.5 × 9.4 × 5.2
Sannomaru Shozokan

56
Princess Takamatsu Kikuko
Mitsumine-gama Kiln
Manaita plate named "Hashihime, Konan"
1976
each approx. 33.0 × 6.5 × 7.5
Sannomaru Shozokan

57
Kato Hajime
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with horse design in iron painting
1950
d.13.5, base d.5.8, h.7.0
Chichibunomiya Memorial Park

58
Kato Hajime
Mitsumine-gama Kiln
Vase with flower design with blue glaze
1950
d.9.6, h.13.4
Chichibunomiya Memorial Park

59
Kato Hajime
Mitsumine-gama Kiln
Small dish with pine design in iron painting
1950
d.12.0, h.2.8
Chichibunomiya Memorial Park

60
Kato Hajime
Mitsumine-gama Kiln
Small dish with Mitsumine design in iron painting
around 1951 or 1952
d.11.6, h.3.1
Chichibunomiya Memorial Park

61
Kato Hajime
Mitsumine-gama Kiln
Lidded rice bowl with pine design in cobalt underglaze
1951
d.11.0, base d.4.5, total h.7.5
Chichibunomiya Memorial Park

62
Kato Hajime
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with whirl pattern in iron painting
1951
d.11.0, base d.5.6, h.7.0
Sannomaru Shozokan

63
Kato Hajime
Mitsumine-gama Kiln
Shell shaped incense caddy, porcelain with iron painting
1963
5.5 × 5.8 × 3.3
Sannomaru Shozokan

64
Kato Hajime
Mitsumine-gama Kiln
Ceramic inkstone with blue glaze
1965
10.1 × 9.0 × 2.0
Sannomaru Shozokan

65
Kato Hajime
Large dish with scallion design
1930
d.41.3, h.6.8
Sannomaru Shozokan

66
Kato Hajime
Ceramic plate with a fox painting
around 1954
11.8 × 23.5
Sannomaru Shozokan

67
Kato Hajime
Bowl, peacock blue glaze with bird design
1957
d.30.0, h.12.2
Sannomaru Shozokan

68
Kawai Kanjiro
Tea cup, cobalt and copper glazes
1940
d.11.8, base d.5.3, h.9.0
Sannomaru Shozokan

69
Kawai Kanjiro
Pair of cups with flower and grass design
1943
each d.9.0, h.7.2
Sannomaru Shozokan

70
Kawai Kanjiro
Bottle, cobalt and copper glazes
1957
d.14.5, h.20.2
Sannomaru Shozokan

71
Hamada Shoji
Lidded box with iron painting round pattern
late 1930's to early 1940's
d.12.3, h.13.8
Sannomaru Shozokan

24
Princess Chichibu Setsuko
Mitsumine-gama Kiln
Vase with Unofu glaze
date unknown
d.12.8, h.9.7
Chichibunomiya Memorial Park

25
Princess Chichibu Setsuko
Mitsumine-gama Kiln
Vase with ash glaze and Tenmoku glaze
1964
d.12.4, h.9.8
Chichibunomiya Memorial Park

26
Princess Chichibu Setsuko
Mitsumine-gama Kiln
Vase with *usuyukiso* plant design in iron painting
date unknown
d.8.7, h.11.2
Chichibunomiya Memorial Park

27
Princess Chichibu Setsuko
Mitsumine-gama Kiln
Vase with Irabo glaze
date unknown
d.12.0, h.14.3
Chichibunomiya Memorial Park

28
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with Irabo glaze
1956
d.15.0, base d.5.2, h.6.0
Sannomaru Shozokan

29
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl in Shino style, named "Baika"
1958
d.12.3, base d.5.7, h.7.8
Sannomaru Shozokan

30
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with Oribe glaze
1959
d.14.5, base d.5.4, h.7.5
Sannomaru Shozokan

31
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl in Kizeto style, named "Yuku-haru"
1960
d.13.7, base d.8.5, h.8.8
Sannomaru Shozokan

32
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with brown glaze named "Yamazato"
1963
d.10.5, base d.6.9, h.8.6
Sannomaru Shozokan

33
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with black Irabo glaze named "Cho-u"
1963
d.14.2, base d.6.0, h.6.6
Sannomaru Shozokan

34
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with Irabo glaze
1964
d.17.6, base d.6.5, h.6.1
Sannomaru Shozokan

35
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with blue glaze named "Oimatsu"
1965
d.12.0, bottom d.8.9, h.10.0
Sannomaru Shozokan

36
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with white glaze and blue rim named "Issei"
1965
d.14.5, base d.5.0, h.6.2
Sannomaru Shozokan

37
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with Tenmoku glaze and white rim named "Utamei (Yo-ya-kuraki)"
1966
d.14.7, base d.5.7, h.6.3
Sannomaru Shozokan

38
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with marbleized clay design
1967
d.12.2, base d.8.5, h.7.4
Sannomaru Shozokan

39
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with marbleized clay design named "Yuzukuyo"
1968
d.13.8, base d.6.0, h.8.2
Sannomaru Shozokan

40
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with marbleized clay design named "Amanogawa"
1968
d.15.3, base d.5.3, h.6.9
Sannomaru Shozokan

41
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with Unofu glaze
1969
d.13.5, base d.8.0, h.8.9
Sannomaru Shozokan

42
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with Tenmoku glaze (Taihisan type)
1970
d.15.8, base d.4.8, h.6.4
Sannomaru Shozokan

43
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with Irabo glaze named "Natsu-no-yo"
1974
d.16.0, base d.5.7, h.6.7
Sannomaru Shozokan

44
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Shallow tea bowl with Unofu glaze named "Aokoke"
1974
d.15.5, base d.4.8, h.6.5
Sannomaru Shozokan

45
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with feldspar glaze named "Shunsetsu"
1976
d.11.3, base d.6.5, h.8.2
Sannomaru Shozokan

46
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl with Unofu glaze named "Kiu"
1976
d.15.7, base d.6.4, h.4.8
Sannomaru Shozokan

47
Prince Takamatsu Nobuhito
Mitsumine-gama Kiln

List of Exhibits

1
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl, named "Susononoharu" (Tea bowl, Kizeto ware, with Ao-oribe glaze rim)
1952
d.12.7, base d.6.8, h.6.7
Sannomaru Shozokan

2
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl, named "Omokage"
(Tea bowl with Tenmoku glaze)
date unknown
d.12.0, base d.5.2, h.7.7
Sannomaru Shozokan

3
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl, named "Horo" (Tea bowl with *kumagaiso* plant design in iron glaze and cobalt underglaze)
1951
d.10.5, base d.5.5, h.7.7
Sannomaru Shozokan

4
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl named "Fuyu-gomori"
(Tea bowl with white glaze)
1951
d.12.3, base d.5.8, h.12.3
Sannomaru Shozokan

5
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl, named "Wakatake"
(Tea bowl with Ao-oribe glaze)
date unknown
d.11.2, base d.7.0, h.7.5
Sannomaru Shozokan

6
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl named "Tsutsudori"
(Tea bowl in Kizeto style)
1951
d.11.4, base d.6.1, h.8.4
Sannomaru Shozokan

7
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl named "Beni-fuji"
(Tea bowl in Shino style)
date unknown
d.11.6, base d.6.3, h.6.7
Sannomaru Shozokan

8
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl named "Fujinotsuki"
(Tea bowl with Unofu glaze)
1951
d.11.5, base d.6.4, h.8.8
Sannomaru Shozokan

9
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl named "Zuiko"
(Tea bowl with yellowish glaze)
1952
d.11.5, base d.6.8, h.7.3
Sannomaru Shozokan

10
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Kumidashi tea bowl named "Zansho"
(*Kumidashi* tea bowl with brown glaze)
1950
d.9.0, h.7.0
Sannomaru Shozokan

11
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Kumidashi tea bowl named "Nowake"
(*Kumidashi* tea bowl with Irabo glaze)
1950
d.8.5, h.6.0
Sannomaru Shozokan

12
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Kumidashi tea bowl named "Makiba"
(*Kumidashi* tea bowl with Ao-oribe glaze)
1950
d.9.0, h.6.2
Sannomaru Shozokan

13
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea cup named "Yukige"
(Tea cup with Unofu glaze)
1951
d.6.3, h.9.5
Sannomaru Shozokan

14
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Large tea cup named "Gorin"
(Tea cup with cobalt underglaze)
1950
d.7.5, h.10.7
Sannomaru Shozokan

15
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Large ashtray with squirrel design
1950
d.12.5, h.11.3
Sannomaru Shozokan

16
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Small ashtray with squirrel design
1951
d.11.5, h.9.1
Sannomaru Shozokan

17
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Ashtray with *kumagaiso* plant design
1950
d.12.2, h.3.7
Sannomaru Shozokan

18
Prince Chichibu Yasuhito
Mitsumine-gama Kiln
Tea bowl, child and stilt
1951
d.12.9, base d.6.3, h.7.9
Sannomaru Shozokan

19
Princess Chichibu Setsuko
Mitsumine-gama Kiln
Tea cup with poem in cobalt underglaze
1950
d.7.5, h.9.0
Chichibunomiya Memorial Park

20
Princess Chichibu Setsuko
Mitsumine-gama Kiln
Incense caddy with iron painting on white glaze, crane
around 1950
3.7 × 6.8 × 2.8
Chichibunomiya Memorial Park

21
Princess Chichibu Setsuko
Mitsumine-gama Kiln
Incense caddy with cobalt underglaze, rabbit
1963
4.5 × 4.2 × 3.5
Chichibunomiya Memorial Park

22
Princess Chichibu Setsuko
Mitsumine-gama Kiln
Water dropper with iron painting on porcelain, quail
1967
3.7 × 6.4 × 4.0
Chichibunomiya Memorial Park

23
Princess Chichibu Setsuko
Mitsumine-gama Kiln
Vase with iron painting on ash glaze
date unknown
d.9.7, h.10.0
Chichibunomiya Memorial Park

Memories of Mitsumine-gama Kiln

— The Princes and Ceramics

January 6 (Tue.) — March 8 (Sun.), 2009

Foreword

Mitsumine-gama Kiln was constructed by ceramist Kato Hajime in 1950, in response to Prince Chichibu Yasuhito's interest in creating ceramics, while recuperating at the Prince's second house in Gotemba. The name "Mitsumine-gama" comes from the "three peaks" (*mitsu* means three, and *mine* means peak) seen from the Gotemba second house, namely the mountains Fuji, Hakone and Ashitaka, and the three peaks of Chichibu, closely related to the Prince's family name. The Prince created ceramics guided by Kato Hajime once a year for three years. Although the chances were limited, his works are superior suggesting his interest towards ceramics and his academic personality. His works received much attention at the *Posthumous works of Prince Chichibu Exhibition* held in 1953 at Tokyo and Osaka after the Prince passed away. In the next year due to the enthusiasm of related persons, the Prince's posthumous works were published in a catalogue titled *Gyokuyo Ryuho* in order to place them among history.

After Prince Yasuhito passed away, the Mitsumine-gama Kiln was closed for a while, but then members of the Imperial Family and close people visited and enjoyed creating ceramics once again with Princess Chichibu Setsuko. Prince Takamatsu Nobuhito and Princess Takamatsu Kikuko often visited Mitsumine-gama Kiln and spent time creating ceramics. Both of them were well versed in art in general, and all of their works such as tea bowls, show their refined tastes.

In this exhibition, we will introduce the works related to Mitsumine-gama kiln among those bequeathed from late the Prince Chichibu and late Prince Takamatsu families, along with works by ceramists with deep connection to both families such as Kato Hajime who guided them.

We express our deep gratitude towards Gotemba City (Chichibunomiya Memorial Park) for lending their valuable works to this exhibition.

January, 2009

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan